3 March 2010

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦　学長

VOL.166

「亜細亜」 制作　教育学部学生　山口　潤

Ⅰ　巻頭言 ―― 2

弘前大学長　**遠藤正彦**

Ⅱ　特集 卒業・修了・退職にあたって ―― 4

人文学部・人文社会科学研究科
教育学部・教育学研究科
医学部医学科・医学研究科
医学部保健学科・保健学研究科
理工学部・理工学研究科
農学生命科学部・農学生命科学研究科
事務局・附属病院

Ⅲ　弘前大学創立60周年記念事業 ―― 25

Ⅳ　海外だより ―― 28

Ⅴ　新任教員自己紹介 ―― 30

Ⅵ　けいじばんコーナー ―― 30

Ⅶ　編集後記 ―― 30

特　集

特集 卒業・修了・退職にあたって

Ⅰ　巻頭言

卒業生・修了生の皆さん 学位記取得おめでとう

皆さんは揃って本学の100周年を迎えましょう

弘前大学長
遠　藤　正　彦

学部卒業・大学院修了の皆さん、学位記取得誠におめでとうございます。皆さんのこれまでの本学における勉学や活動に、心からの敬意を表します。

皆さんは、我弘前大学にとりまして、重要な記念すべき年の卒業生・修了生となりました。その重要な記念すべき年というのは、第1に、本学が国立大学法人化され第1期中期目標期間の評価をうける最終年度であったということと、第2に、平成21年が本学の創立60周年に当たっていたということです。

第1の国立大学法人化について、皆さんは、本学に入学して以来、年毎に教育の内容、システム、教材等の改善が見られ、また、校舎改修やキャンパスの整備が進み、本学がリフレッシュされていくことを感じていませんでしたか。それは、全体としてはまだまだ不十分でしたが、国立大学法人化したための、本学の対応としての教育の重視からです。

そして一方、機器分析センター、出版会、白神自然観察園、北日本新エネルギー研究センター、高度救命救急センター等本学の基盤整備が進み、本学が総合大学として厚みが増してきたことを感じてはいませんでしたか。これも国立大学法人化のゆえんです。

同じく、附属図書館に保存されていた資料の中から、“津軽領元禄国絵図写”や、太宰治の旧制弘前高等学校入学当時の未公開の写真や、その他の埋もれていた資料が陸続とでてきました。太宰治生誕100年に臨んで文学碑も建立されました。そこに、新制弘前大学創立以前の本学の重みを感じていたかも知れません。

そして重要な記念すべき年ということの第2は、本学が、昨年新制弘前大学として創立60周年を迎え、平成21年度中、創立60周年記念事業が展開されていたことです。しかもそれは、学生参加という形で進められました。

皆さんは、この学生参加の創立60周年記念事業に参加して、“やったね！”という強い想いを感じて、卒業・修了していくのではありませんか。

創立60周年記念式典会場を中心に、揃いのTシャツやウィンドブレーカーの学生が式典を華やかに盛り立てました。記念式典の中で創立60周年記念歌を演奏した弘前大学フィルハーモニー管弦楽団と弘前大学混声合唱団、これは実にすばらしかった。後に、文部科学省銭谷眞美事務次官と東京藝術大学宮田亮平学長が絶賛し、全国的に有名になりました。私の目からは、記念式典を中心に参加した多くの学生が、誇りをもって活動していることが感じられました。そして、私もすごいなと思いました。

この一年を通じて行われた学生参加の創立60周年記念事業は、様々なものがありました。記念スポーツ大会、記念登山、記念映画会、各種の演奏会、書道・美術・写真の展覧会、演劇発表会等々。中でも学生シンポジウム「私が学長だったら、○○○をします！」には驚かされました。聴いていた私が身の縮む思いをした発言もありました。

極めつけは、総合文化祭です。文京町キャンパスにあふれんばかりの学生と市民。総合文化祭始まって以来の市民の数5、700名と聞きました。皆さんは、この時とばかり持てるエネルギーを爆発させました。私も皆さんと一緒になって、ジャンケンゲームをやりました。皆さんは、学生時代のこのひとこまを、生涯忘れないでしょう。

全国的に大学祭が低調な中で、本学の学生・教職員が一体となった総合文化祭には、学内外の多くの人々が関心を持っています。他大学からも見学に来ました。

昨年の11月そして本年2月を中心に、インターネット上、本学は全国国公私立770余大学中注目度ナンバーワンになりました。この高い注目度は年を越しても続いています。これは、国立大学法人化後、本学の基盤整備が進んだこと、そこには高就職率、国家試験の高合格率や、総合文化祭での学生のエネルギー等に、注目が集まっているのでしょう。

皆さんは、この重要な記念すべき平成21年度、即ち、第1期中期目標の最終評価の年、そして創立60周年という重要な記念すべき年を過ごし、自信と将来への希望を持つことができました。

気が付いてみると、皆さんはこれから40年経って、確実に弘前大学創立100周年を迎えることができます。すばらしいことではありませんか。弘前大学はこれからの40年間で大きく飛躍していくでしょう。それを皆さんは見守り応援して下さい。それこそ、この創立60周年記念事業を担った学生の皆さんの使命ではありませんか。

皆さんは、弘前大学で過ごした、特に創立60周年事業を担った自信をもとにして、社会に出て活躍して下さい。期待しています。

本年定年退職の皆様 おめでとうございます

皆さんのお陰で創立60周年を迎えることができました

平成22年3月本学を定年退職される教職員の皆様、御退任おめでとうございます。そして、大役を果たされ、誠に御苦労様でした。

本年は言うまでもなく、本学にとりまして、国立大学法人第1期中期目標期間の最終年度であり、更に創立60周年という節目の年でした。皆さんは、その節目の年の御退職なので、一つの感慨をお持ちのことと思います。

60年前の昭和24年、本学は5つの包括校を基に新制弘前大学として創立されました。教育的資源の不足の状態での出発でした。それを引き継ぎ少しずつ発展し続けていたものの、昭和40年代の大学紛争に遭遇しました。皆様の中には、本学又は他大学の教職員・学生として、これに遭遇された方がおられます。

しかも、本学における大学紛争は、他の大部分の大学が沈静化していく中で、解決に至るまで最も年月を要した大学の一つでした。このため、教職員の皆様は大きなハンディーを背負って、より多くの御苦労をされました。

その後、我国経済のバブル期とその崩壊の過程で、地域経済の低迷とあいまって、本学は首都圏大規模大学との大学間格差が開いていくばかりでした。

こうした我国のバブル崩壊（平成3年）と前後して、大学設置基準の大綱化（平成3年）により、大学改革が始まりました。皆様は、教養部廃止（平成9年）をドミノの初めとし、理学部と農学部のシャッフルによる理工学部と農学生命科学部の設置、人文学部改組、教育学部改組、教育学部の一部と医療技術短期大学部とによる医学部保健学科の設置、大学院地域社会研究科の設置と大学院の整備、遺伝子実験施設を始めとする大学附置の施設・センターの設置等と、本学の遅れていた部分を取り戻すべく基盤整備が進みました。

そして、国立大学法人化（平成16年）により、大学は民間的手法による経営・管理・運営の場に立たされました。ここで本学は、持てる本学固有の資源の少なさに改めて驚かされました。格差を背負っての評価と競争を、皆様は厳しく実感されたことでしょう。

国立大学法人化後、本学は自立化と特徴化を進めて、日本一の地方大学をめざしました。国立大学法人化前の本学の改革を、遅れていたものを取りもどすための改革であったとすると、国立大学法人化後のそれは、本学を特徴化するための改革であったと言えましょう。

まず機器分析センターが立ち上がりました。以前は貧弱な限りの本学の分析機器も、今では標準的ものはすべて揃いました。出版会が立ち上がりました。3年目にして、活動が評価され、有限責任中間法人大学出版部協会に加盟を果たしました。ここには多数の私立大学と国立10大学より成り、国立大学は7旧帝大の他は三重大学、東京農工大学と弘前大学だけの加盟です。留学生センター（後に国際交流センター）が設置されました。就職支援センターが設置され、本学の就職率は上昇し、平成19・20年度は人文学部、教育学部、理工学部、農学生命科学部が全国のトップテン内に入りました。緊急被ばく医療を担う我国初の高度救命救急センターが設置されます。地球温暖化、CO_2削減を研究対象にした我国最大規模の植物園・白神自然観察園が設置されました。青森市に、自然エネルギーを教育研究する我国初の北日本新エネルギー研究センターが設置され、ここを本学の青森キャンパスとしました。

そして、創立60周年記念事業として、式典、記念出版、記念歌、太宰治の文学碑の建立、産学官連携の拠点となる“コラボ弘大”の建築、そのエントランスルームに、本年度日展の内閣総理大臣賞に輝く東京芸術大学宮田亮平学長の金工作品“幸せのリング”の展示等が行われました。学生が様々なイベントを行いました。

この第1期中期目標期間の最終年度に、前述の様々な基盤整備と創立60周年記念事業とが重なって、平成21年度の本学は特徴化がかなり進みました。昨年11月そして本年2月にインターネット上、本学が全国国公私立大学770校中、注目度ナンバーワンになりました。これは、受験生を含む学外の方々が、本学の様子に関心を示しているからです。

こうした、本学の発展に力を尽くして下さった方が、言うまでもなく皆様方です。

今、我国では100歳を超える長寿者はめずらしくありません。皆様も40年後の弘前大学創立100周年を、今年の卒業生・修了生と共にお祝いできるよう祈念致します。

弘前大学を去るに当たり、現在の弘前大学には誇りを感じておられるでしょう。皆さん、誠にありがとうございました。退職後は、第2の充実した生活を送られますように。そして、本学の発展にもぜひアドバイスをお願い申し上げます。

Ⅱ　特集　卒業・修了・退職にあたって

学部、大学院を卒業、修了する代表、並びに29名の定年退職者のうち21名の方から寄稿いただきました。

定年退職のご挨拶

公共政策講座
教授　**堀内健志**

この場をお借りしまして、皆さんに、定年退職のご挨拶を申し上げます。

私は、昭和50年4月に、弘前大学に赴任しました。ですから、この3月でちょうど35年になります。また、昭和44年に当時の経済学科に憲法の集中講義で来たことがあり、それから41年になり、ほんとに長い間お世話になったことになります。自分では、そんなに長かったという実感があるわけではありませんけど。

大雑把に、振り返えると、まず昭和50年から60年ぐらいの間、この時代は、いわば大学紛争時代といえます。キャンパスの至る所に鉄パイプをもった学生のデモ行進の姿、そしてアジ演説がありました。今では信じられません。平成に入り、今度は大学改革の時代で、組織の再編が行われました。その後は、法人化がなされ今日に至っています。

他方、私にとり、外せないのが、クラブ活動を通じての学生とのつきあいであった。

まず卓球部の顧問として、実に長い間学生とつきあった。OB も相当の数にのぼる。毎年卓歩という文集をつくり部員間で話題を共有したし、明け方まで飲み明かしたこともある。また、学会で大阪梅田を歩いていて声をかけてきた人が卓球部 OB だと聞いて、感動したこともある。もう一つ競技ダンス部の顧問であったが、これはいろんなアマチュアの選手権大会でライバルとしても闘った。もちろん上位の学生選手たちは、優勝者として皆の喝采を浴びることが多く誇りに思った。学生諸君に、講義への出席は大事であるが、クラブ活動での社会勉強も劣らず人間形成にとり、貴重な機会であるといいたい。

青森法学会のことにも、触れないわけにはいかない。この青森、弘前の地に、なかなか受け入れられない分野、それは法学である。誤解と偏見の地域である。この地に10数年前にようやく法学を語る場ができた。青森法学会がそれであり、今日60名を超す会員が名を連ねている。そして、今日若手のすぐれた法学者が定着しつつある。どうか大事に見守って頂きたい。リーガルマインドをもって物事を冷静に考えることが地域社会にとり有益な成果をもたらすことになることを確信しています。

最後に、研究のことについて、私の専門は、憲法ですが、さまざま国法学関連の難解な論文を書いてきて、それがどのような意義を有するのか、説明することはあまりなかった。後世の研究者がいずれの日にか、そうか、なるほどとうなづいてくれることがあれば、これにすぐることはない。思う存分に仕事をさせて頂いた弘前大学、そして皆さんに感謝し、末永い繁栄を祈念します。

人とのつながり

人文社会科学研究科
佐藤美咲

弘前大学には学部・大学院合わせて6年間お世話になりました。学部時代は、初めての一人暮らし、サークル活動やアルバイトなど、“大学生らしい”4年間を過ごしたと思います。中学の頃からの夢を叶えるために大学院進学を早々に決め、友人たちが卒業していく中、孤独に勉強を続けていく決心をした時のことを懐かしく思います。結果、その夢は叶えられなかったけれど、この2年間で得たモノは自分の一生を決める大切なモノばかりでした。学内の公務員講座で出会った仲間達もそのひとつです。院生で年齢も上の私に対して、彼らは身構えることもなく、とても自然に受け入れてくれました。合格サポーターとして彼らと一緒に過ごした時間は、私の中で本当にかけがえのないものとなりました。

また、大学院に進学し、右も左もわからなかった私に、厳しいながらも温かく、根気強くご指導してくださった加藤先生には感謝の気持ちでいっぱいです。論文の締め切りに追われ、眠れない日々が続くと、ひょっこりと研究室に顔を出してシュークリームを差し入れしてくださる等、いつも気に掛けてくださいました。

弘前大学では、最高の仲間と素晴らしい先生方に恵まれ、本当に幸せな学生生活を送ることができました。この6年間でお世話になった全ての方々に感謝の意を表すとともに、大学生活で見に沁みて感じた“人の輪”というものを大切にしながら、今後は社会人として頑張っていきたいと思います。

A friend in need is a friend indeed

人間文化課程
古川菜穂美

私は大学の四年間でかけがえのない友達に出会うことが出来ました。楽しいときは一緒に笑い、悲しいときは励ましてくれる友達が居たからこそ、私の充実した大学生活があったと言っても過言ではありません。

特に、所属していた野球サークルのマネージャーの仲間とはいつも笑いの絶えないサークル活動を行うことが出来ました。時にはお互いの夢や恋愛を語り合い、まさに青春だったなと思います。また、二年間一緒にゼミ活動を行った仲間と行った初のインド旅行も私にとって一生忘れられない思い出となりました。見知らぬ土地で不安があったものの、それを乗り越えることが出来たのはゼミの仲間の協力があったからこそだと思います。

私はこの大学生活の中で、勉強に、サークルに、就活に、恋愛にいつも全力を尽くすことが出来ました。この様に言い切れるのは、いつも近くで支えてくれた友達の存在があったからです。大学に来て良かったと思える一番の理由が良い友達に恵まれたことだと言える私は本当に幸せ者です !!

友達皆と、寛大な先生と、家族に心から感謝しています。本当にありがとうございました !!!

４年間を振り返って

人間文化課程
早坂美春

私は大学に入学する際、一つの目標を立てていました。それは本をたくさん読むことです。社会人になったら読書をする時間が取れなくなるので、今のうちに本を読んでおこうと思ったのです。私は自分の読みたい本だけではなく、講義で取り上げられた本も積極的に読むようにしました。中には難解で理解できないものもありましたが、簡単に読めない本を読破したときの達成感は大きなものでした。また、本の感想を自分ひとりの中にとどめておくのではなく、他の友人たちと話し合えたというのも貴重な経験だと思います。友達から自分と違う考えや感想を聞くことは楽しいことでもあり、自らの視野を広げるきっかけにもなりました。

弘前大学での四年間は本当にあっという間でした。太宰治を代表とする文学、弘前公園の桜や岩木山の自然、弘前城や点在する西洋建築に見られる歴史、その三つが融合するみちのくの古都、弘前。そんなイメージに惹かれて弘前大学に入学した私でしたが、本当にこの津軽の地で大学時代を過ごせてよかったと感じています。弘前で過ごした四年間のことを忘れずに、これから新しい場所で頑張っていきたいと思います。

４年間を振り返って

現代社会課程
鈴木一朗

これから、まず大学生活の思い出、次に後輩へのメッセージを述べていきたいと思います。

大学4年間を振り返って、「楽しかった」というのが率直な感想です。

とても有意義な4年間でした。寮生活、サークル活動、ゼミ等々・・・今まで未経験のことばかりでした。

特に、その中でも寮生活は最も貴重な経験だったと思います。共同生活は中々難しいもので、時には喧嘩をすることもありました。今まで全然違う環境で育った者同士が寮という一つのコミュニティで生活するわけですから、当たり前といえば当たり前のことなのかもしれません。衝突することで気分を害することもありました。しかし、衝突することによって相手を理解することが出来ました。そのことを新たに学べたということが自分にとって一番の成長だったと思います。

最後に、後輩に対してメッセージを少し述べたいと思います。まず、前提として単位は取って下さい。単位をしっかり取った上で、大学生活を思いっきり楽しんで下さい。社会人になったら、おそらく遊ぶ機会が減ると思います。今しか出来ないことは多々あります。卒業する際に「楽しかった」と思えるよう、後悔しない大学生活を送って下さい。以上です。

定年退職にあたって　～子どもの笑顔のために～

教育保健講座
教授　佐藤雄一

日本全国が大学紛争・学生運動で渦巻いていた昭和44年3月に弘前大学医学部を卒業した「44クラス」は、大学改革、臨床研修医制度改革をスローガンに非入局路線を選択し、大学には残らず卒業後医学研修のため各地の病院に赴いた。そして私は、大学紛争が終息しつつあった昭和46年に弘前大学に戻り医学部小児科学教室に入局（医局制度がなくなった現在では、この用語は死語であるが）した。44クラスが大学に反旗を翻したにもかかわらず、当時の小児科学教授の泉幸夫先生、助教授の横山碓先生をはじめとする小児科学教室の先生方は、我々を暖かく迎えてくれ、小児科での診療・研究を指導してくれた（今でも、心より感謝している）。

医学部小児科では、白血病・悪性リンパ腫・神経芽細胞腫などのいわゆる小児がんの診療と研究に従事したが、横山助教授のもとでの深夜までの実験研究（造血機構の解明、がん細胞の薬剤耐性解除）が懐かしく思いだされる。しかし、何よりも強く印象に残っているのは、小児がんの子どもとの触れあいであった。当時の小児がんは fatal disease ;malignancy と言われていたように、その予後は不良で、小児がんの子どもは発病後数カ月～数年で短い命を終えていた。治療のかいもなく死んでいく多くの子どもの死に向き合い、診療にあたった医師・看護婦ともに悲愴感・挫折感にうちひしがれ、診療に対する自信を失いかけていた。しかし、繰り返し行われる採血･注射･骨髄穿刺･髄腔穿刺などの苦痛を伴う検査や治療、そして副作用の強い化学療法や放射線療法を受けながら闘病している子どもが、病室で時折見せる笑顔には心が救われる思いであった。特に寛解し退院時にみせる『子どもの笑顔』には何ものにも変えがたい穏やかさがあり、神々しささえ感じられた。その笑顔に「小児がんの子どものために頑張ろう」と励まされ、診療への気力を奮い立たせられた。最近では、新しい抗癌剤の開発、造血幹細胞移植などの医学の進歩により小児がんの治療成績は飛躍的に向上しつつあり、喜ばしい限りである。

平成6年に教育学部教育保健講座（養護教諭養成課程、大学院教育学研究科養護教育専修）に赴任してからの「小児科学」等の授業では、専門的な知識や技能の修得だけでなく、子どもの言葉に耳を傾け、子どもの思い（喜び、楽しみ、悲しさ、苦しさ、悩み）に共感でき、そして、『子どもの笑顔』が素敵だと思える教員を目指して欲しいとのメッセージを送ってきた積もりだが、はたしてこの思いは学生に通じていただろうか。

定年退職を迎え、将来教員となる学生には、自分が勤務する学校を『子どもの笑顔』であふれる学校にして欲しいと願っている。さらに、『子どもの笑顔』であふれる日本、そして世界になって欲しいと祈っている。

貴重な体験

学校教育教員養成課程
葛西未央

私は、高校を卒業してから社会人を4年務めた後、弘前大学に入学しました。そんな私にとって、大学生活は毎日が刺激的で新鮮なものでした。学ぶ楽しさ、時間の自由さなど、大学生の特権はより大事に感じられ、興味のある授業や課外活動などに積極的に参加することができました。特に、所属した自然地理学研究室での経験は、自分の視野を格段に広げる機会となりました。研究室では、現地での野外調査が多く、青森県内はもちろん、北海道や東北地方、タイや韓国などの海外を訪れることができ、各土地での様々な見聞は、多くの発見や驚きの連続でした。日本と気候帯の全く異なるタイでは、文化や風土、そこで暮らす人々の違いを肌で感じ、改めて母国を見つめ直す機会になりました。また、地元の自然の中でのフィールドワークでは、新たな青森県の姿を見出し、より郷土愛が深まったように思います。その中で、お互いに切磋琢磨したゼミ生、多くのご教授をして下さった先生方、現地でお世話になった方々とのかけがえのない出会いがあり、そのおかげで本当に充実した4年間を送ることができました。大学でのこの貴重な体験を活かし、これからも何事にも意欲的に邁進していきたいと思います。

夢への挑戦

学校教育教員養成課程
栗川美里

中学校の音楽の先生になりたい。弘前大学への入学は、私にとって中学生のときからの夢へ近づく第一歩でした。しかし、ピアノも声楽も初心者同然、クラリネットが少し吹けるだけの私にとって、音楽科の授業はついていくことも儘ならず、劣等感ばかりを感じ、自分が音楽教師を目指して良いのかと悩んだこともありました。

それでも夢を諦めずに努力し続けることができたのは、常に夢の原点を思い出させてくれた“吹奏楽団”での活動があったからだと思います。森の中の果樹園での演奏会、弘前市内小学校の鑑賞教室での演奏、地域の方々や子どもたちと音楽を共有できる喜びが、夢を追いかける原動力となりました。

3年後期からは、音楽以外の活動にも参加するようになりました。“弘大ネットパトロール隊”ではネットいじめという今日的教育課題について学ぶと共に、模擬授業を重ね仲間と授業技術を高め合うことができました。“わの会”では、教員採用試験に向けて本気で取り組み、切磋琢磨しあうことの出来る素晴らしい仲間に出会うことが出来ました。

私は4月から中学校の音楽教師として第一歩を踏み出します。今の私があるのは、弘前大学でお世話になった多くの先生方、仲間との出会いのおかげと確信し、心より感謝しています。

これまでのすべてに、そしてこれからに

学校教育教員養成課程
松藤陽子

弘前大学での4年間、私はとても出会いに恵まれた日々を過ごしてきました。同じものに打ち込む友人や先輩・後輩、ご指導してくださった先生方、他にもたくさんの人たちに出会い、その中で多くを知り、さまざまな経験をさせてもらいました。そうした人たちに、この場を借りて感謝します。本当にありがとうございました。

でも、そう、出会いには恵まれました。しかし、「環境」には必ずしも恵まれていない、そう思っていました。その理由は、特に教育学部の校舎にあります。割れた窓、暗い廊下、何といってもその古びた姿…「なぜ教育だけ」という思いがありました。そんな校舎が現在、改修工事真っ最中。この校舎で出会い、一緒に過ごした友人たちと卒業後再び会う機会があれば、きっとその度に「あんなに古い校舎だったのに、今はあんなにキレイでずるい」とか、そんなしょうもない愚痴を言い合うんだと思います。でも、卒業を目前にする今、そんな愚痴さえ、卒業して離れてしまう友人と私を繋ぐものになる気がします。これは皮肉じゃありません。ここで出会えた友人とのこれからの繋がりに一役買ってくれるだろう、教育学部校舎に向けての感謝の気持ちです。

教育学部校舎へ、長い間お疲れ様でした。そして、ありがとう。

大学生活を振り返って

生涯教育課程
鴨狩佑佳

大学生活を振り返ると、まず4年前の入学式を思い出します。大学生活への期待と周りとうまくやっていけるだろうかという不安が入り混じり、複雑な気持ちで迎えました。しかし、大学は、同じような分野に興味関心を持った者が集まった場所であり、打ち解けるのに多くの時間はかかりませんでした。入学当初は名前も顔も知らない者同士で戸惑うこともありましたが、今では共に多くの課題や困難を乗り越え、掛け替えのない仲間となりました。四年間の大学生活は、授業や部活動、バイトなどに追われる忙しい毎日ではありましたが、その中でたくさんの出来事や人々との関わりを経験することができました。そして、それらの経験が、自分自身を大きく成長させてくれたのも事実です。中でも自身の大きなターニングポイントとなったのが、三年次の教育実習です。それまで、教員になりたい気持ちはあったものの、採用試験のことなどを考えると、どうしても決意を固めることができずにいました。しかし、教育実習を経験するうちに、子供たちと触れ合うことに真の喜びを感じている自分自身に気づき、覚悟を決めました。今年の春からは念願であった小学校教員として、新たに始まる生活にわくわくしています。後輩の皆さんへ。大学生活はとても短いです。楽しいことも辛いことも皆自分をブラッシュアップしてくれる材料です。今自分にできることに精一杯取り組み、悔いのない大学生活を送ってください。

退職を控えて思うこと

麻酔科学講座
助教　工藤美穂子

42年4ヶ月の在職 ----- 弘前大学で学んだ4年間を加えると半世紀近くを弘前大学で過ごした事になり、改めてその歳月の長さに驚く。イギリス人の友人にはもっと以前から“ほとんど刑務所暮らしだネ”と言われてきた。終身雇用とは無縁で転職が高く評価され、それを繰り返してキャリアを積んでいく彼らの視点から見たら、こんなに長く一箇所に留まっているなんて余程の能無しか変人タイプに分類されおよそ信じられないことなのだろう。

しかし私にとっては塀の中で過ごした時間は何物にも代え難く、貴重で充実していた。何よりも好きな研究生活をある程度の束縛はあったものの経済的な後押しもあり自由に続けることが出来たこと。塀の中でありながら、国内外を問わず自由に塀の外の数多くの学会や研修会に参加出来たこと。さらに長期の国内留学や海外留学も出来たこと。その時々で紆余曲折があり、決して平穏容易ではなかったが、恵まれた環境と教室の同僚に支えられて何とか成し遂げてきたと思っている。それらを通してさまざまな分野に人脈も広がり、退職後もそれらの繋がりは私の大切な宝だ。研究室での大学院学生や学部学生との遣り取りも私に新鮮なエネルギーを与えてくれた。思い起こせば若い時には大きなプレッシャーやストレスに押し潰されそうになった時もあったが、いつの頃からかそれらを心地良いと感じるようになっていた。麻酔科学教室での研究生活そのものが私の趣味の中でいの一番であり、それを定年まで存分に楽しむことが出来たことを大変有難く幸せに思う。

改めて常にそのような環境を与えてくれた教室の皆様に心から感謝申し上げます。退職後も今しばらくは教室の研究の手伝いを続けるつもりですので、また引き続きお世話になりますがどうぞ宜しくお願い致します。最後に仕事と家事、育児をなんとか両立させ今日まで健康で働くことが出来たのは夫をはじめ家族の一人一人の協力があってこその賜物。

どうもありがとう。

卒業にあたって

医学科
秋山慎太郎

四年前の春、医師になるためのスタートラインに立ってからあっという間に卒業生になってしまいました。弘前での思い出は、多岐にわたります。まず、青森の四季折々の行事はすばらしいものでした。青森を思い返すと「立佞武多の迫力」、「恐山の神秘的な雰囲気」、「奥入瀬の紅葉の美しさ」などが今でも鮮明に浮かび上がってきます。「青森の自然は美しい」の一言につきるように思います。このような自然や文化が今後も変わらずに存在し続けて欲しいと願っています。

次に、学業に関してですが、こちらは、編入学生であったこともあり、カリキュラムが密に詰まっていて大変だったことを思い出します。一方で基礎医学と臨床医学を同期間に勉強することはとても有意義だという実感があります。基礎医学の内容は臨床を深く考察するには今や不可欠であり、基礎の内容が「こういうふうに臨床に生きてくるのか」と実感できることが今後の医学教育や研究の発展のキーになるように思いました。

5年生から始まった臨床実習での思い出は、まず、一緒に実習をした班員に恵まれとても楽しく、切磋琢磨して実習を行うことができたことが何より感謝すべき思い出となっています。また、5年生の夏には三沢空軍病院という米国領土での病院実習に参加したことも米国臨床留学に興味のある私にとってはとても貴重な経験をさせて頂きました。

今後は東京にある虎の門病院にて2年間の研修生活を送ることとなります。大変な研修だと聞いていますので滅入ることなく着実に研修をこなすことが次の目標です。そして米国の医師免許取得を目指し時間を見つけて英語を上達させたいと考えています。

弘前大学医学部に編入学生として入学させていただいたことに感謝し、今後は「がんの治療」という視点から患者さんに貢献していきたいと考えます。このような充実した学生生活を送ることのできる環境を与えてくださった先生方に感謝致します。ありがとうございました。

三沢空軍病院での写真

六年間を振り返って

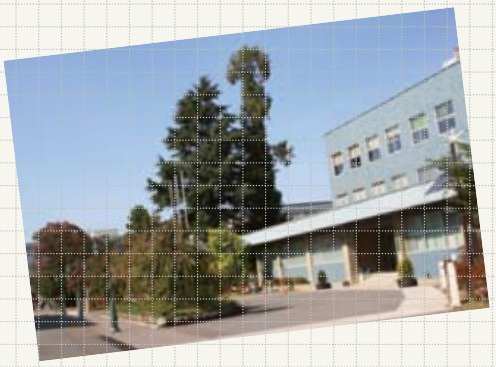
医学科
横山雄平

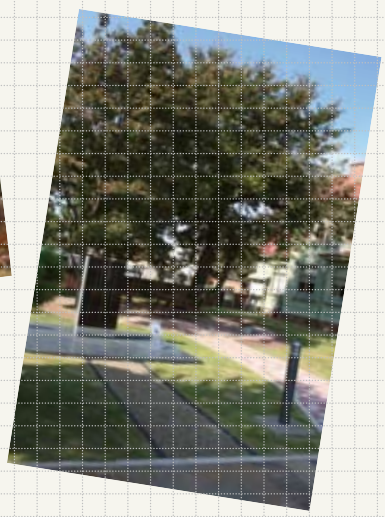
第104回医師国家試験も終わり、突然やる事が無くなってしまった今日この頃。弘前大学の前期試験を受けに来ている受験生を街で見かけると、六年前の自分を思い出す。

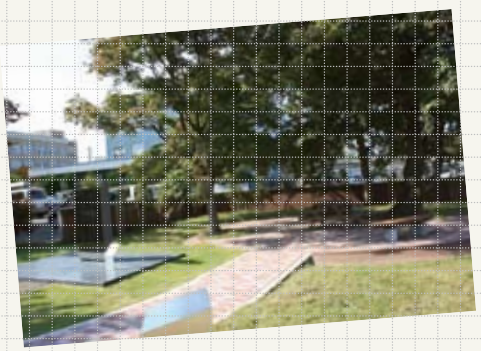
六年前は、大学に入ったらあれもしようこれもしようと考えていたが、思えばこの六年間本当にあっという間に過ぎてしまった気がする。写真部という部活に所属し、学園祭のサークルや国家試験対策委員も経験した。色々な事をつまみつまみこなした様な気がしていたけれど、部活をかなり熱心にこなした訳でもなく、勉学をまじめにこなした訳でもなく、一番鍛冶町でふらふらしている時間が多かった気がする。国家試験前にそんな事を考えていると、本当にちゃんとした医師になれるのだろうかと不安になった。

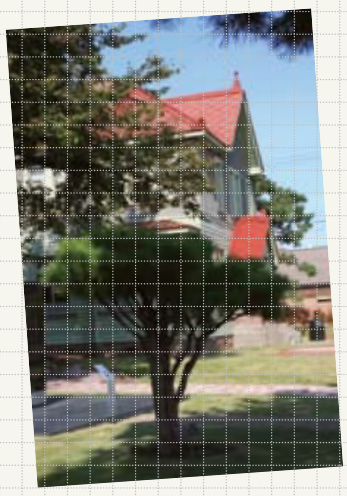
ただ、弘前に来て良かったと言える事が一つある。それは人間関係だ。多くの先輩や後輩を含め、沢山の知り合いが出来た。街の人達とも知り合いが出来た。単身弘前に来て、一体どれだけの人達と関わっただろうか。沢山の人間関係を通じて考えた事、学んだ事、支えられた事はきっと入学前の自分とは違うはず。

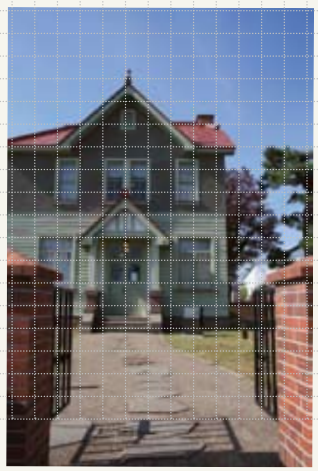
四月からは社会人としての新たな生活が始まるけれど、日々謙虚に、けれどモチベーションは高く、弘前大学で学んだ事を背負って精進したいと思います。











弘前大学での10年

医療生命科学領域
放射線生命科学分野
教授　市丸俊夫

弘前大学医療短期大学部から4年制大学（医学部保健学科）が発足する直前（H12年）に赴任した。担当する授業時間や科目が、また、会議が多いのに閉口した。4年制の発足に伴い、カリキュラム編成と実施、新任教官の赴任の手続き、教官研究室の手当など整備すべきことは多かった。しかし、建物、教官数、予算措置などはっきりしない事が少なからずあり気をもんだ。短大は良き学生に満ちていたが4年制になればより良き学生が集まり、そして育っていくと思えてうれしかった。

4年制に入るや厚生省管轄の診療放射線技師指定規則が改訂（大綱化）となり、カリキュラムや授業担当教官の再編である。医療短大時は放射線技師教育施設として実験室が乏しく、また、高度な医療機器（X線CT、MRI装置など）がなく、4年制になるのを機にこれらを調達あるいは整備しようと思った。これは新棟が建設されたのに合わせて5～6年かけてそれなりに実現できた。4年が経過して保健学科カリキュラムの見直しとなった。事の良否を十分に問う間もなく他学部に合わせて、大幅な授業時間の短縮に踏み切った。しかし、授業時間が減少しても学生の学力の維持が求められた。4年制大学では学生の募集が全国区で行われて優秀な人材が集まるので、広く世界に跳躍する人材、保健領域のリーダ的人材の育成が期待できた。これには21世紀教育の履修、卒業研究の導入、多様な教官との交流、4年制という学生の自覚などを通して4年制大学としての教育内容が高められたに違いない。しかし、研究体制については課題が残されているのではないか。

4年制が完成するや矢継ぎ早に大学院がスタートした。修士、博士前期・後期課程の設置へと進んだ。一挙に大学の制度的完成（大学院保健学研究科）を目指した。これは平成21年度に完成する。4年制と大学院設置の流れは単に弘前大学だけではなく国立系医療短大がほぼ歩調を揃えた。さらに他の医療系大学の増設が続いた。その結果、保健医療系教育界が大変革期に突入した。今この時期は少子高齢化、人権高揚化、高医療・福祉化など社会的背景を受けて医療界も大きな変革期にある。保健医療系4年制大学で育った多くの人材は医療の新しい時代の担い手として厳しさと大きな責任を担って進むことになろう。

忙しく、気ぜわしい10年であった、しかし、大学設置という大きな目標ある歩みであったが故に楽しく、また、充実した年月でもあった。

弘前は幼少期の私の憧れ

医療生命科学領域
生体機能科学分野
教授　佐藤公彦

私は弘前にラブレターを書くことにします。なぜなら、弘前は私の幼少期の憧れだったことを想い出したからです。私は青森県の隣、秋田県大館市比内町の20km程山奥、長部部落という小さな集落に生まれました。昭和19年のことです。両親は小学校の先生でした。勿論四方が山で川にはカジカがいたので小学生になるまで夢中で追いかけました。カジカは茄子と煮て食べるとうまいのです。学校を移っても山の中ですから病院を見たことがありません。しかし、弘前には大きな大学病院があると聞きました。たまに食べたユキノシタ、印度のうまかったこと、それは青森で穫れたものです。また、娯楽の乏しい山村では、時折、津軽民謡一座が村の会館にやって来て歌会をします。カンテツ和尚が美女と踊りまくる人形劇も覚えています。金太豆蔵ではありませんでした。大館はつまり津軽の文化圏なのです。中学時代、奥羽線で大館から弘前に来たことがありました。駅近くには五叉路！がありリンゴ売りで賑やかでした。雨でも歩ける商店街のアーケードと「カクハ」という大きなデパートがありました。桜はもう目に入りませんでした。20代は仙台と東京で過ごしましたが、昭和48年6月、弘前大学医学部（故佐藤清美教授、二生化学）の助手となった時には懐かしさと不思議な巡り会わせを感じました。教室の研究テーマはがん細胞のアイソザイム（酵素分子種、サブタイプ）の変化に関するものでした。カジカや野鳥を捕まえることの好きな私にはクロマトグラフィーでGST-Pと言うアイソザイムを精製するのは同じことでした（Satoh K et al. PNAS USA 82: 3964-3968, 1985）。教室の皆と一緒に仕事をし、鍛冶町では沢山飲んで騒

ぎました。なお、GT-P は特異的な前がんマーカー（細胞の目印）として国内外の研究者に活用され、がんの始まり、がんの出来る謎（イニシエーション）の解明にも有用と分かりました。ワトソンの突然変異説がおかしい、がんは遺伝子変異が原因ではないことも確からしくなって来ました（保健学研究科紀要 9, 167-179, 2002）。がんは人類の宿業ではなく、もうダメと諦めるものでもないようです。しかし、「Time goes by!」と ELT の持田かおりさんは優しく歌っています。つい、36年が過ぎ大館に帰ることになりました。弘前では2人の子供にも恵まれました。私は浦島太郎、妻は津軽産です。

退職にあたって

医療生命科学領域
生体機能科学分野
准教授　佐藤　剛

「弘前大学を去るにあたって」の原稿依頼を受けて、改めて昭和38年に弘前大学に入学してから47年間お世話になったことに感慨を覚えます。

昭和42年大学病院中央臨床検査部を皮切りに、昭和48年医学部第二生化学講座、そして昭和54年医療技術短期大学部、医学部保健学科、大学院保健学研究科と一貫して本町キャンパスに籍を置かせていただきました。

大学病院中央臨床検査部では、精度管理を主体として患者様のデータをいかにして迅速・正確かつ精密に出すかという事を学び、第二生化学講座では、きちんとしたデータをもとにいかにして、新しい知見を出すかと言うことを学びました。それまでも、検査技師学校、医療短大の非常勤講師として臨床検査技師教育に少しは携わっておりましたが、医療短大の専任教官となって感じたことは、看護・放射線技術・検査技術・理学療法・作業療法など様々な専門があり、さらにその中でも一人一人が自分の専門をもった教官の集団である弘前大学の中でも非常に特異な存在であるということでした。

医療短大は他の学部から独立していたためか、クラス担任制、就職支援や単位の実質化など、現在、全学的に取り組んでいる問題のいくつかはすでに実施されていたと思います。

また、臨床検査技師ほど多様性を持ち応用範囲が広い職種は他に見あたらなく、学生の就職先は国家資格を必要とする病院・健診・検査センターだけでなく、臨床検査技術を期待される医療機器メーカー、製薬会社や大学の研究室など多岐にわたっており、またその専門性も様々であります。私もこのような中に身を置き、大学病院検査部や第二生化学講座の先生方そして医療短大・保健学科の様々な先生方および事務方から幅広くご協力をいただき、学生の教育や研究および就職支援などを行うことができました事を深く感謝いたしております。

大学院博士後期課程ができ、衛生検査技師学校創設時からの夢であった臨床検査技師・教育者・研究者を自前で育てる環境が実現する場面に立ち会うことができたことは、大変幸せに思っております。

優秀な人材育成、高度な研究機関として、弘前大学のさらなる発展と、皆様方のますますのご活躍を祈っております。

心苦しかった５年間

医療生命科学領域
病態解析科学分野
教授　佐藤達資

弘前大学に教員として奉職し、納得出来ずに優遇され、心苦しく思っていることがあります。それは定年退職と学長候補者の投票資格です。定年退職については職員就業規則第21条第2項に「職員の定年は、満60歳とする。ただし、大学教員の定年は満65歳とする。」と規定され、大学教員は優遇されています。また、学長候補者の投票資格についても学長候補者選考規則第11条で、教員については「(3) 教授、准教授、講師、助教及び助手」、教員以外の職員については「(5) 事務職員（技術職員を含む。）のうち、係長（技術専門職員を含む。）以上の職にある者」及び「(6) 医療職員のうち看護師長及び主任技師以上の職にある者」と差があります。

一方では、弘前大学細目に「大学の管理運営に当たっては、教員と教員以外の職員は対等であると考える。」と記載されています。ここに記載されている教員と教員以外の職員は対等であると考えることと前記の定年退職の年齢差及び学長候補者の投票資格の職階差についての整合性はどのように理解すれば良いのでしょうか。

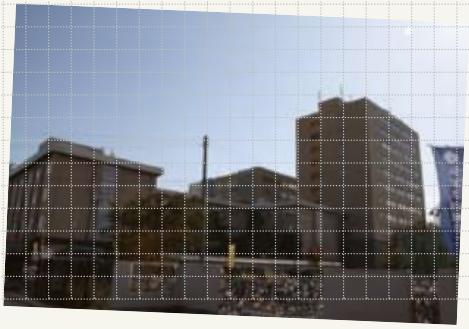
「対等であると考えるのは大学の管理運営に限定している」とでもなるのでしょうか。一理あるようにも思われます。しかし、雇用条件に差があって、教員以外の職員の方々に対等な関係で、大学の管理運営に当たって頂くことは納得しにくいことです。また、「本学を代表し、その職務を総理する」学長候補者の投票資格についても対等でないことになります。このように考えて、特に60歳になってからは以上の2点から、心苦しく思う5年間でした。

永年お世話になりました弘前大学を去るに当たり、真に対等な関係から「世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学」であり続けますように願っております。

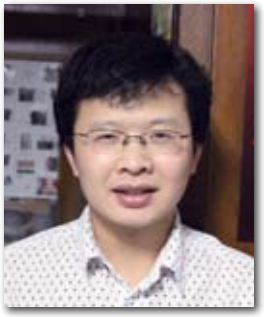
充実した大学生活

放射線技術科学専攻
佐藤伶美

私は専門学校卒業後、弘前大学に3年次編入しました。編入生としてクラスに馴染めるか不安はありましたが、現役生たちは温かく迎えてくれ、入学してすぐに弘前公園の桜まつりに誘ってくれました。そのことが、すごく嬉しかったし、夜桜があまりにキレイだったのが印象的です。入学してからのことを振り返ってみると、「大学生」を満喫した2年間だったと思います。大学の勉強の傍ら、夏には弘前ねぷた、青森ねぶたに参加し、専門学校にはなかった大学ならではのサークルにも所属して他学部の学生とも交流をもつことができました。我ながらアクティブな学生生活だったと思います。4年生になってからは研究に力を入れました。ゼロからのスタートだったので、見るもの、聞くもののほとんどが初めてのものが多く興味をひかれ、また疑問も多々あり、それらを解決していくうちに未知な分野を追求する面白さを知った気がします。ここでしかできない研究活動によって物事をやりぬく根気強さを養えたと思います。先生方や先輩方の丁寧で熱心な指導のもとで勉強でき、充実した学生生活を送れることができました。



大学院生活を振り返って：充実した三年間

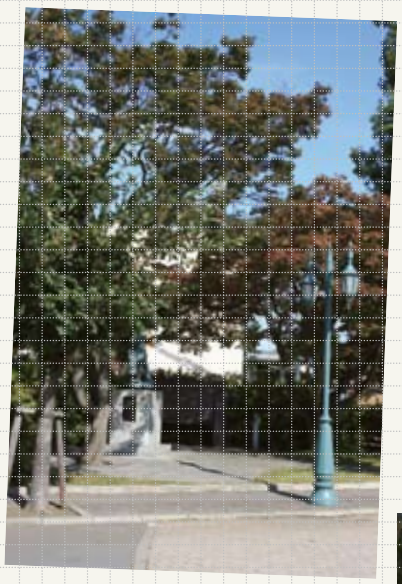


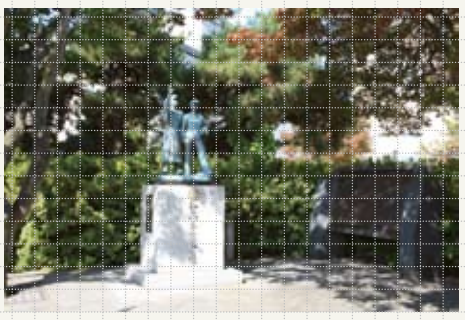
保健学研究科
唐（とう）　志明（しめい）

2007年にぎやかな北京を離れ、静かな弘前に来ました。最初は学部の研究生として入学し、一年後に大学院に入りました。弘前での生活はあっという間で、三月に修士課程を修了し、新しい所へ行きます。

三年間の留学生活はとても充実したものでした。研究生としての1年目は日本語クラスと学部の授業を受けていました。大学院では、授業以外、主に自分の研究をやっていました。計画を立て、倫理申請をし、研究対象者を募集し、実験をし、論文を作成しました。その中で、迷ったり、悩んだり、疲れたり、興奮したりしたこともありました。最後には完成して大変うれしかったです。それに、学会や講演会にも参加し、色々な最新情報を習得したことで自分の視野を広げることができました。私生活においては、私費留学生なのでアルバイトは日常生活で重要な一部でした。時々疲れたこともありますが、自分の生計を立てるだけでなく、色々な人と出会い、楽しかったです。

弘前を離れる際に、自分が一番言いたいことは感謝の気持ちです。私を指導してくれた若山先生を始め、日本語を教えてくれた先生、保健学科の諸先生方、自分の研究を支えてくださった弘前老人連合会、良くお世話になった弘前の方々などに心より感謝申し上げます。





和魂洋才　―学問の神髄―

理工学研究科（地球環境学科）
教授　力石國男

かつて大学は最高学府と呼ばれ、社会から一目おかれる存在であった。そこは真理を探究し、学問を後世に伝える学びの庭であった。私は幸運にも博士課程進学後すぐに九州大学に生業を得ることができたが、7年後に弘前大学に移り、その後の32年に及ぶ教師生活がもうすぐ終わろうとしている。長いようで短かった年月を振り返るとき、私の脳裏に煉瓦作りの塀と高い木立に囲まれた母校のキャンパスが浮かんでくる。塀の中には背の高い洋風の建物が林立し、中央部に静寂な池を囲む和風庭園があった。初めてそこに足を踏み入れたときに感じた荘厳な雰囲気を私は忘れることができない。いま振り返ると、キャンパス自体が学問の神髄を象徴していたように思う。私はそれを和魂洋才と呼びたい。

和魂洋才とは日本人の精神が西洋の知識を身にまとった状態を指す言葉であるけれども、自然の美しさを切り取った和風庭園を和魂に譬え、均整のとれた洋風の建物を洋才に譬えることもできる。また、和魂は自然の彩りの中に美を見いだす日本人の感性であり、洋才は自然を超えた、調和的な美野空間を創り出す西洋人の理性であるといえる。文章の流れに規則性はないが、細やかで柔らかい心理描写・風景描写を得意とする日本語は和魂から生まれたものであり、文章構成が堅固で、名詞・動詞の人称や時制の曖昧さを許さない西洋言語は洋才から生まれたものである。人生の哀しみを緩やかな旋律にのせた津軽山唄は、和魂だけが紡ぐことのできた調べであり、音階や和声・フーガを駆使した幾何学模様のバロック音楽は、洋才がなければ構築できなかったと思われる。

こう考えると、数学や物理学などの学問が西洋で生まれ、壮大な体系に発展してきたのは必然的であったように思われる。しかし、西洋にも和魂（感性）の豊かな人が少なくなく、日本にも洋才（理性）に長けた人々が輩出している。自然科学の分野では、多くの場合、両者を兼ね備えた人々が学問を創り、発展させてきたように思える。つまり、学問は和魂と洋才のコラボレーションで発展してきたのである。私はこのコラボレーションこそが学問の神髄であると思う。古典力学の基礎をつくったニュートンは、英仏海峡の潮の干満と地球－月－太陽の位置関係にみられる規則性に気づいて、万有引力の発見に至った。ニュートンといえども、コアの部分には地球の鼓動に耳を傾ける和魂を秘めていたのである。芸術の世界では、ショパンの音楽はスラブの哀愁（和魂）とヨーロッパの知性（洋才）が融合したものであると私は思う。

上述のニュートンの例が示すように、学問が不連続的にジャンプして発展する場合には、和魂が決定的な役割を果たすことが多いように思われる。現在私が取り組んでいる地球温暖化や雪氷圏の衰退の問題では、多くの仮定と近似計算を組み込んだ数値モデル研究が世界中で行われている。でも私は、今はまだ地球の息吹に耳を傾ける段階であると信じている。定年にはなったが、私の学問はまだ道半ばであるので、もうしばらくはこの道を歩み続けたい。

最後に、これまでお世話になった教職員の皆様や、私を大学教師として育ててくれた卒業生・在学生の皆様に、この場を借りて心から感謝の気持ちをお伝えします。

インターネットに関する昔話

理工学研究科（電子情報工学科）
教授　荒木　喬

インターネットに関する昔話をご紹介したいと思います。現在ではインターネットは広く世界中に普及しておりますが、弘前大学へ赴任した当時は現在のようになるとは予想出来ない状況でした。

現在のワープロや計算機なるものは無く、各学部の事務には事務書類を印刷する活字組装置があり、専門の職員が書類を見ながら文書を作成していました。また、教員が研究成果を論文として学会誌に投稿する場合には、タイプライタを使って教員みずから文書をタイピングしていました。もし、文書の内容の順序を入れ替える場合、最初からタイプしなおす必要があり、図やグラフの作成にあたっては、レタリングにより作成しなければならないため、大変な時間と労力が必要な時代でした。

私が大学に赴任した当時の研究テーマは超高層物理であり、人工衛星からのデータ処理を行うために、当時の計算機センターに通うのが日常でした。

雨の日も雪の日も通ったものでした。当時のプログラムはカードパンチャーにてカードに穴をあけたものをカード

リーダという装置を通して計算機に入力していました。複雑で命令数が多いプログラムでは、カード枚数が1000枚以上になり、重いため数値計算をするためには体力が必要な時代でした。

その後しばらくして、通信法の規制緩和によりモデム装置を応用した電話によるデジタル通信が可能になったのを期に、内線電話から計算センタの電話接続により、リモートコントロールにて接続する装置を試作しました。これはとても便利で、研究室から計算センタに行かずに計算が行え、さらに東北大学や東京大学の大型計算機も使用可能となりとても便利でした。この便利さを他の研究者にも体験してもらうために、東北大学に先んじて、教育学部全体にOKIネットを構築、その後旧理学部の一部と旧教養部にも同じネットワークが構築されました。これらのネットワーク構築時には中継機器を設置しなければならず、研究室の片隅に設置させてくださるようお願いに行くのが大変でした。また、事務室にパソコンを1台設置するのも大変で、何回もお願いに行き許可していただいたことを考えると、覚醒の感があります。

このように、自由に研究生活を送れたのも、皆様の暖かい援助があったためと感謝いたしております。

最後になりますが、皆様の益々のご活躍をお祈りいたしております。

大学職員としての退職に際して

理工学研究科　総務グループ
係長　佐々木美津子

平成22年3月31日付退職に際し、ご教示いただきました皆様には、心よりお礼を申し上げます。

大学に採用となる数週間前、母の友人に頼まれたアルバイトが初めての仕事でした。暗い土間で1日6時間煎餅を焼く仕事に、興味もあり苦は無かったのですが、初めてのアルバイト代は約束の時間給単価を今の時価に換算すれば100円低く計算した内容でした。他人とあまり争うことなく過ごした私でしたが、事前了承も無く約束を違えた事業主に怒りをぶっつけた記憶が今でも鮮明におぼえています。

昭和43年4月1日に弘前大学人文学部に採用となり、職場環境は、アルバイト先とは雲泥の差でした。新職場で先輩方に仕事を教えて頂き、一緒にスポーツ、遊びと春夏秋冬、野山を駈けずり周りました。人文学部での教室勤務が最初の仕事でした。津軽弁のみに慣れた生活の私には、標準語での会話は口が縺れ、大変で、電話受信恐怖症になった一時期もありますが、尊敬する小林時三郎先生と出会い、お話することにより自然と解消されました。図書購入に携わった当時、大学の先生は、すごい、この大量の本を何時読まれるのかと疑問に思ったものです。勤務も3年すぎ、通った夜間の各種学校にも慣れた頃、校長先生から、お茶の先生を紹介され一生の恩師に出会いました。お稽古、サークル活動等の生活をし、結婚して32歳で3人の母となりました。

生活に追われ、お稽古に専念出来なかった時、先生が「千円があれば子供の靴が買えると思うでしょうね。お茶を学ぶことは、人のすべてを学ぶことに繋がるのですよ。お稽古はいいときに来なさい。」と言われ、その深い意図も考えず、仕事、子育て、家業のりんご栽培に情熱を注ぎました。職場では、先輩の御誘いにより会計関係事務に携る約38年間の中で、母の死を向えた40代が別の趣味の再開となります。そして、50代の施設部勤務時代に部長等のお仕事に微力ながら参加させて頂き、信念を貫く姿勢をみて、30代に出会っていれば、全体事業からの視点で事務職を考えられたのではと思ったものです。部長が退職年にレイアウトしていたシダレ桜が、春になると咲きほこります。その花をみるたび、余裕のない自分のノルマを果たすことで精一杯だった42年間の勤務時間と思います。自分の可能性に挑戦した日々、いかに多くの方の励ましと教えで斬り抜けてこられたか昨今、痛切に思います。前進のみで過去を振り返る機会の無い日々に、特集を企画された関係各位の皆様により、留まり、過去に戻る日を頂いたことに感謝しております。

我が家の子供達も32歳を筆頭に我道を進んでおり、3月に孫の誕生の予定です。家族に紙上でありがとうを伝えたいと思います。

また、現在勤務の理工学研究科の若いパワーが漲っている皆様、職場、家庭、友人の和を大切に毎日をお進み下さい、そして、期待しております。

大学生活を振り返って

電子情報工学科
葛西博文

この4年間、絶え間なく育っていたものがある。それは振り返るといつだって自分の力になっていた。難解な授業の試験が訪れるたびにより強固なものとなり、ちょっとした休日の間に輝かしい思い出となる。これを皆は友情と呼ぶ。自分の大学生活が「おもしろかったなぁ」と思える全ての理由が友情へと繋がっている。一人ではもう耐えられない、そう思うことが何度あっただろうか。試験が思うよりずっと難しく、単位が大丈夫だろうかと悩んでいた時にかけてくれた友の言葉「単位は来なくても、夏休みは来るんだよ」。目の前に広がる夏休みという広大な空を前に、足元に石ころのようにゴロゴロ転がっている単位にばかり気を取られていた自分に前を向くことを教えてくれたのも友人だった。たまにはしょうもない話で盛り上がったりもした。くだらない話に何時間も費やし、真夜中に家に帰るときにまた思い出し笑い。そんな些細な日常に小さな幸せを感じられたのも友人がいたからだ。きっとこれからもいろんな出来事が起こるだろうが、友情がそこにあれば乗り越えていけるだろう。

充実した４年間

知能機械工学科
佐川恭一

この4年間はあっという間で、とても充実したものでした。

私の大学生活は寮生活から始まりました。不安を胸に入寮しましたが、良き先輩や同期の面白い仲間に恵まれ、楽しく過ごすことができました。色々ばかをやったりもしたし、嫌なことや辛いこと、そして楽しいこと、本当にたくさんのことがありました。でもそれら全てが多分そのときにしかできないことで、貴重な経験だったのだと今は思います。

4年間頑張った部活動でもたくさんの思い出ができました。私が所属した器械体操部での活動は日々本当に楽しく、そして、今まで出来なかった技が出来るようになる喜びを与えてくれる最高の時間でした。また、お世話になった先生や先輩、後輩、そして同期の素晴らしい仲間にも恵まれました。部活がなかったら、僕の大学生活はもっとつまらないものになっていたと思います。

地元の札幌を離れ、弘前大学に入学してからたくさんの人と出会って、私は少しずつ成長していったのかなと思います。4月からは社会人になりますが、弘前で得た経験を生かして頑張りたいと思います。

大学院生活を振り返って

理工学研究科
佐藤昌尚

学部4年間夢中になっていた部活を卒部し、打ち込めるものを失った状態で始まった大学院生活でした。その穴を埋めるかのように大学に毎日来て勉強を続ける日々が続き、変化のない生活をしていく中で、大学院に進学して本当によかったのかと思うこともありました。ですが、興味のある分野が自分の研究テーマとして決まってからは研究に打ち込むことができ、とても充実した日々を過ごせたと感じます。生活のほとんどを研究が占めていて、特に PASJ（日本天文学会の欧文雑誌）に論文が掲載されたことや、新聞に自分の研究が掲載されたことは嬉しいことであるとともにとても貴重な体験ができたと思います。人生80年と言われる中、私は2年という歳月を大学院で過ごしました。私が80歳まで生きると仮定し、単純計算すると2年は2.5% にしか相当しませんが , この2年間がその数値をはるかに上まわる程有意義であったと言える自信があります。

弘前大学を修了するにあたり、御指導下さった諸先生方から教わったこと、大学院での貴重な経験を社会に還元できるように頑張りたいと思います。

弘前での10年間

地域環境工学科教授
教授　**万木正弘**

え、もう10年になりますか。多くの方々から言われる言葉ですが、本人も同じ思いです。2000年8月に弘前に来てからあっという間の10年間、馬には申し訳ないですが馬齢を重ねた感じのこの間を少し振り返ってみたいと思います。

私はそれまで企業の研究所に30年間勤めており、そこから直接弘前大学に来ました。30年間一般社会の企業でのやり方、考え方に練れ親しんでいましたので、来た当初は大学の風土・文化に戸惑うこともしばしばでした。実質的な結果や効率よりも判断の過程を最重要に考える大学における意志決定のメカニズム、単年度予算ではなく次年度への繰り越しも認められる予算管理システム（最もこれは単年度処理に移行しましたが）等々、鳩の気持ちはよく分かりませんが豆鉄砲をくらった鳩のような思いでした。また、私がここに来た頃は大学の法人化が政府の方針として出され、大学改革の必要性が喧伝されている頃でした。法人化反対の意見も一理あるものもありましたが、大学以外の組織の経験を積んだ私としては法人化および大学改革の方向性には納得できるものが多くありました。

そういう中、我々の学科（当時の地域環境科学科）では日本技術者教育認定機構、いわゆるJABEEの認定を目指して教育改善活動を行っていくことにしました。JABEEは国際的な技術者を育成、技術者教育の質の保証を目的に高等教育機関の教育プログラムを審査・認定するもので、1999年に設立されたものです。幸い2005年に認定を受けることができましたが、この良いところは、そのプログラムでどのような学生を育成するかを明らかにするとともに、そのための教育目標を定め、教育目標を達成するためのカリキュラム、各科目のカリキュラム内での位置付けを明確に定める、いわゆる目標管理がしっかりしていることです。このような考え方に立てば、各科目が教育目標とどのように関連しているか、何時の時点で教えるべきかなどの必要性が明確になります。これまでの大学では教員が主体と考えられ、教員ができる科目を教える、という考えが強いように思われますが、この辺もこれからは考え方というか教員の意識を変えていく必要があるように思います。

このほかにも、弘前大学に就任早々アキレス腱を切ってしまい、最初の授業は松葉杖をついて行ったこと、2006年には2ヶ月間オランダのデルフト工科大学で海外研修を行ったこと、写真で何度か学長賞をいただいたこと等々、思い出深いことが色々あります。私に取っては弘前での10年間は、仕事、住む場所ともそれまでと全く違った経験を積むことができ、私の人生に彩りを添えることができたと思っています。これもひとえに弘前で私を支えてくださった皆様のおかげです。本当にどうもありがとうございました。

大学生活を振り返り

生物生産科学科
安田美穂

私にとって大学生活は今までの学生生活の中でも、最も多くの事を学び、友人、知識、自分が成長できた実感など数えきれない事を得て、実に充実した4年間であったと思います。講義、実習活動、研究活動、就職活動など、辛い事も多々ありましたが、私にとって成長を促した大切な経験でした。特に就職活動においては、自分について深く考えさせられました。今まで自分がやってきた事、培ってきた事など自分の存在を人に伝える事の難しさを痛感し、上手く言葉にできず、何日も自分と向き合い、悩み、時には自信を無くして途方に暮れる日が続きました。その中で、この大学生活を思い起こし、やって来た事、得たものを再認識していき、自信につながっていき、自分という存在をアピールする事が出来たと思います。結果的にも良い方向へと導き出せる事ができ、これまでの経験の大切さを知りました。大学生活でやってきた事は、就職活動だけでなく、これからの人生に良い影響を与えると思います。何か目標を持って、それをやり通した事はきっと大きな自信や成長につながっていくと思います。

最後に私を支えてくれた友人、家族、先生方、全ての方々に感謝し、社会へ出ても大学生活で得た事、学んだ事を決して忘れず、より良い事に還元できるように精一杯努力したいと思います。

大学４年間で私が得たもの

地域環境科学科
飯島大介

入学した当時を振り返ってみると右も左もわからず親元から離れて暮らすことや一人新天地に行くことに不安がありました。しかし、それ以上に大学での研究やサークルなどの大学生活に対して希望を持っていたと思います。

そんな私もこの大学４年間を通してみて学科内やゼミにおける研究だけではなく、サークルやアルバイトを通して得た人間関係や知り得た知見などのとてもかけがえのない財産を築くことができました。この財産は、卒業してからも私の人生を大きく支えてくれると思います。また、このような人間関係を築くことができるきっかけとなったのは、弘前大学のおかげであると思っており、卒業を間近に控えた今となってはこの大学を卒業することを誇りに思います。

最後に後輩たちへのメッセージとなりますが、４年間の大学生活において、勉学だけではなく、アルバイトやサークルといった、あなたが夢中になれることを見つけて、それに対して積極的に挑戦してみてはどうでしょうか。きっとさらに人間関係が広がり、今後の自分の人生においてプラスとなるきっかけを作ってくれると思います。また、その財産が将来社会へ羽ばたくための糧になると思います。

6年間の出会いに感謝

農学生命科学研究科
葛巻英祐

光栄にも執筆を依頼されましたが、何を書くべきか。恐縮ながら、学生ライフを振り返り、自分なりの後輩へのメッセージとさせて頂きます。大学6年間の財産は何だろうか。私にとってそれは、研究・部活動の実績や資格などの形あるものではなく『人との繋がり』です。振り返るとこの6年間は様々な岐路の連続でした。どの道が正解だったかは未だに分かりませんが、私は自分の選んだ道に後悔はありません。それは選んだ道の先々で人との縁に恵まれ、多くの人間関係を築けたからです。学生同士のコミュニケーションはもちろんですが、アルバイト・学会・就職活動といった学外での人との出会いは私を大きく成長させてくれました。時には失敗や壁にぶつかる事もありましたし、それら全てを解決できたわけではありません。しかし何かに真剣に取り組む事と、それによって生まれる他者との折衝にはお金で買えない価値があると思います。どの道を志すにしろ、一番大切なのは人間関係やそれを構築するための人間力です。後輩の皆さんには是非多くの出会いを経験し、有意義な時間を過ごして欲しいと思います。最後になりますが、私を成長させてくれた皆様、特に研究室・アルバイト・ラグビー部の面々へ感謝の言葉を贈り、結びとさせて頂きます。ありがとうございました。

「弘前大学における ファカルティ・ディベロップメント(FD)」

21世紀教育センター
高等教育研究開発室
教授　土持ゲーリー法一

5年半という短い間でしたが、数々の思い出が走馬燈のように脳裏を駆け廻ります。平成16年度に新設された高等教育研究開発室において授業改善のためのFDを教職員と一緒に実施してきました。本学の取り組みは、規模は小さいながらも内容的には先進的なもので、とくに、ティーチング・ポートフォリオに関しては、他大学に先駆けてカナダ・ダルハウジー大学のワークショップに本学の8名の教員を派遣して「認定書」が授与され、それが他大学のモデルともなりました。このような取り組みが高く評価され、平成20年度から特別教育研究経費「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動」が展開されています。数年前からラーニング・ポートフォリオを成績評価に取り入れた学生参加型によるシラバス作りのワークショップを実施し、『読売新聞』「大学の実力」担当記者も、この1泊2日のワークショップに参加しました。弘前大学21世紀教育のテーマ科目「国際社会を考える(D)」での授業実践およびラーニング・ポートフォリオの作成は、『ラーニング・ポートフォリオ～学習改善の秘訣』(東信堂、2009年)として刊行され、学生中心の能動的学習の促し方を提示しています。以上のような、本学の取り組み実践は、3月末に「ティーチング/ラーニング・ポートフォリオを活用した授業評価と授業改善への取り組み」と題して、東北大学高等教育開発推進センター編『学生による授業評価の現在』(東北大学出版会)から刊行されます。

また、法人化後の独自のカリキュラムを開発したいとの要望から、「津軽学―歴史と文化」の授業をはじめました。この授業は、地域連携のみならず、高校教員との高大連携を目指したユニークなもので、15回の授業の全容は『津軽学―歴史と文化』(東信堂、2009年)として刊行され、他大学にも影響を与えています。たとえば、福島県立医科大学を中心とする福島県下の大学コンソーシアムのもとに「福島学」が誕生しました。

近い将来、21世紀教育センター高等教育研究開発室が、弘前大学高等教育研究開発センターとして21世紀教育の教養教育のみならず、学士課程教育の構築に向け、さらに大学院教育をも包括したFDセンターに発展することを期待しています。

42年間を振り返って

財務部契約課
課長　黒滝　勲

昭和43年4月に、当時の教養部会計係に採用されてから、今年度末で42年間勤務することになる。

振り返ってみると、いろいろなことがあった。

まず、大学紛争の最中、宿直中に、全共闘系学生に教養部の建物を封鎖されたことが思い出される。幸い、ケガもなく宿直室から逃れることができた。

昭和58年には、大蔵省主催の会計事務職員研修に101日間という長期にわたって参加させていただいたことが、この上ない貴重な経験となった。上司から「研修というものは、勉強も大事だが、人を覚えてくることも大事だぞ。」と言われたことが思い出される。

今も、研修仲間が2~3年ごとに、幹事の地に集まり、思い出を語り合っている。

平成5年に、当時の文部省からの指示により、附属病院において、「医療費動態調査」を行ったことが思い出される(全国の大学附属病院が対象)。これは、管理課と医事課が主となり、各診療科等に対して、臓器別に一週間の診療に使用した医薬品、医療材料など全てを報告してもらい、それらの金額を算出するという膨大な手間を要した調査であった。

帰宅するのは早朝で、それが10日間ほど続いた。その後、医療費の配分積算が診療科別から臓器別に変わり、配分額が増加したと聞き、頑張った甲斐があったと思っている。

予算係長時代、特に忘れられない思い出は、概算要求において、理学部と農学部の改組により理工学部と農学生命科学部が平成9年10月1日に創設されたことである。それには、理学部生物学科の移設や新学部名など様々な紆余曲折があったが、予算内示をもらったときは、予算要求を担当した者とし

ても大変な喜びであった。また、生涯学習教育研究センターの設置（平成8年度）や地域共同研究センターの設置（平成9年度）なども予算化された。

そして、平成16年4月に、国立大学は、運営上の自立性を高め、より個性豊かな魅力ある大学とすべく、法人化されたが、第三者による評価の実施、運営費交付金の1%効率化係数による減額、総人件費抑制策による人件費5年5%の減額など、非常に厳しいものとなった。

最後に、自分がこれまで大過なく来られたのも、上司、先輩、同僚、そして後輩と多くの方々の助けがあったからだと思っております。長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました。弘前大学が、将来を担う若者の高等教育機関として益々発展することを祈念いたします。

定年退職にあたって

学務部留学生課
課長　菊地　學

昭和47年弘前大学に採用となり、以来、大学事務に奉職して38年、弘前大学創立60周年記念の年に60歳でこの春定年を迎えます。他人事のように思っていた定年退職もいつの間にか自身のことになりました。この定年退職を無事故で今日を迎えられましたことは、私にとって大きな喜びであり、それぞれの職場において、楽しいこと、辛いことなどがたくさんあったことが今、限りなく思い出されます。

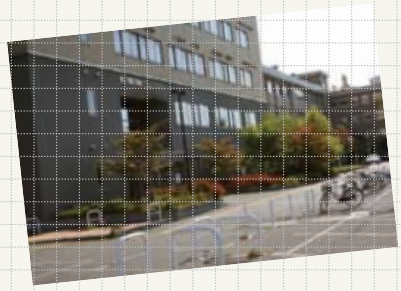
ふり返ってみますと、さまざまな思い出が胸に去来いたしますが、こうして何とか「定年」というひとつの節目を迎え、大過なく勤め上げることができましたのは、よき上司、先輩、同僚、そして後輩に恵まれ、また、素晴らしい先生方と出会い、公私にわたりご指導とご協力をいただいた賜ものと改めて感謝しております。

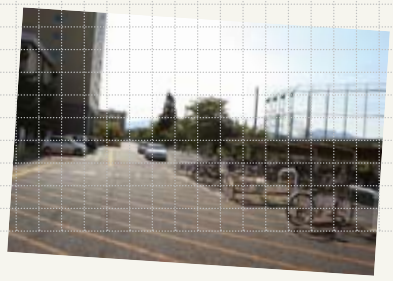
私が就職した時は、大学紛争の後でしたが、後に大学を取り巻く状況も激変し、大学改革そして国立大学法人化と歴史的な改革があり、また、大学キャンパスもすっかり変わりました。今定年を迎えるにあたって、この38年間はあっという間というのが実感です。

平成20年4月から、国際交流センターを集会の場としている個性豊かな留学生の会話を聞きながら留学生課の職務に就いておりますが、最後の年に、国際交流協定校の中国延辺大学創立60周年記念式典出席のため、遠藤学長に随行し、同大学を訪問させていただいたこと、12時間を要して北朝鮮にまたがる雄大な長白山に登山し、山頂の天池（チョンジ）と呼ばれるカルデラ湖の壮大な景観は忘れられない思い出であり、貴重な体験をさせていただきました。本学と延辺大学は共に創立60周年に当たり、今後両校において、世界自然遺産の白神山地と中国長白山の共同研究に向けた調査が行われると思いますが、より良い成果が生まれますことを期待しております。

自分はまだまだ元気なつもりでおり、定年はゴールではなく、新たなスタートととらえ、生活のリズムを維持していくためにも、そして生き生きとした人生を送るためにも第二の人生を実りあるものにしたいと思っています。

最後になりましたが、弘前大学の益々の発展を祈念しますとともに、皆様方の一層のご活躍をこころより期待しております。長い間本当に有り難うございました。





退職に当たって

学務部学生課
課長　奈良岡康則

早いもので退職の時期が来ました。1年1年が長い時もありましたが、今振り返れば懐かしい思い出です。昭和43年5月に奉職以来先輩、後輩、同僚並びに教員の皆様方のお陰で無事退職を迎えることに感謝申し上げます。

自分一人では何も出来ないこと、皆との融和を念頭に仕事をしたつもりですが、生来の短気の虫は押さえようもなく、ご迷惑をお掛けしたと思いますが、退職に当たりお許しくださるようお願いします。

さて、昨年が弘前大学創立60周年ということで、学生と一緒に学生参加事業を実施しましたが、特に2つの登山に学生とともに参加出来たことが、退職時の良い思い出となりそうです。趣味の山登りを若い学生と一緒にまだ登れたことがちょっと自信になっており、退職後も頑張れるかなと思っております。

また、一番のショックは、国立大学の法人化でした。国家公務員から法人職員への転換は意識そのものを変える大きな転機になりました。ルーチンワークから新規事業の企画・立案・実施と負担は多くなりましたが、それなりの達成感を得ることが出来ました。

平成22年度からは、第Ⅱ期中期目標・中期計画期間に入りますが、目標達成に向け、皆さんが一丸となり、頑張ってください。応援しております。

簡単ですが、御礼方々、退職に当たっての寄稿といたします。

ありがとうございました。

北八甲田山登山後の記念

【思い起こせば】

学術情報部
部長　新谷哲雄

還暦、定年など自分としてはまだまだ先のことと思っていたが、「定年通知書」なるものが届いたときにああ自分もそうなんだなあ・・・・と思い知らされた。

大学生活も後2ヶ月余となったとき学園だよりへの原稿依頼があった。

昭和43年大学に奉職してすぐに大学紛争があり、最初の勤務先である東京教育大学文学部の建物が封鎖の憂き目にあい、仕事場を転々としたことなど貴重な経験をしました。

昭和48年5月、弘前駅に降り立ち、弘前大学の門をくぐって早37年の歳月が過ぎ、このだび、めでたく卒業の運びとなりました。

弘前大学では、人事課を振り出しに、附属病院、医学部、総務課、研究協力課、社会連携課での業務に携わり、無事仕事を全うできましたのは、先輩諸兄、同僚、仲間の皆様方にご指導、ご支援を賜ったお陰と深く感謝しております。また中でも医学部創立50周年、大学創立50周年と昨年の大学創立60周年記念式典等に関わりを持たせていただいたことが思い出深い1ページとなったことに感謝しております。特に大学の創立60周年記念式典では、自身の60年とも重なり、ことさら思い出深いひとときをあじわさせていただきました。

平成16年の国立大学法人化後、他の国立大学に先駆け学外への社会連携の窓口とした社会連携課が設置され、そこでは初めて産学官連携という業務に携わり、県内外の企業等の訪問、文部科学省の都市エリア産学官連携促進事業のための中核機関を担うなど、種々の業務を経験させていただいたことに感謝申し上げます。

大学は22年度からは、第二期中期目標・中期計画に沿った対応が求められ、さらに厳しい時を迎えることになりますが、さらなる弘前大学の発展を願いながら、自分のこれからの第二の人生を育んでいきたいと思っております。どうもありがとうございました。

求められる サブスペシャリテイー病理医の責任分担

病理部
准教授　鎌田義正

本邦の国立大学法人附属病院には専任病理専門医が一人しかいない大学が多い。しかし、20年余も先行する東北大学の後、近年京都大学、東京大学がその必然性に気付き、複数の専任病理医を院内に配置して医療の精度を担保しているのは先見の明があると思われる。今定年で母校を去るに当たり、当附属病院における病理医の複数配置の重要性を提言して私に課せられた最後の任を果たしたい。

私は当弘前大学の医学部を昭和45年に卒業後同病理学講座の大学院生になり、4年間恩師佐藤光永教授から人体病理学の薫陶を受けた。それから36年間、即ち、国立弘前病院の初めての病理医として7年間、上記講座の教官として12年間、創設されたばかりの当附属病院・病理部の一人専任病理医として17年間、もっぱら顕微鏡を使って今病める患者さんの病気を組織ないし細胞レベルで形態学的に最終診断し、ずっと医療に携わってきた。私が診断する対象臓器は、頭のてっぺんから足の先まで、ほとんどすべてである。私の顕微鏡の回りを今あらためて見渡すと各領域の病理専門書や専門雑誌（いずれも英書が多い）などの愛読書は数十冊にのぼる。初めて遭遇する稀な疾患の組織病理を一人で理解し、紛らわしい疾患を鑑別診断し、既知疾患の診断基準ないし取扱い規約を再確認するためである。これがないと現今の病理医が求められている日常の正しい診断には支障を来たすからである。これが今の日本における私のような一般病理医の守備範囲である。野球に例えれば、投手、捕手、内野手、外野手を一人で担当しているようなものである。

私は運よく、1979年に厚生省の海外派遣にて西ドイツ・エッセン大学の病理学教室、1995年に文部省在外研究員として米国ジョージ・ワシントン大学の病理部に留学させて頂いた。これら欧米の先進諸国には我々のような一般病理医の他に、皮膚病理、血液病理、神経病理、腎臓病理などのサブスペシャリテイー病理医が必ずおられ、野球で言えば投手は投手、捕手は捕手として、その専門領域を責任分担していた。

近年、画像診断などの進歩に伴い早期病変が発見され、提出される病理検体が微小化傾向にあるうえ、術中迅速診断や移植病理診断、分子病理診断、細胞診断、治療効果の判定などが求められるようになり、質的にも量的にも常に正しい病理診断をするには以前にも増して経験と体力・気力を要するようになってきた。本院でも、複数のサブスペシャリテイー病理医を配置して、その責任分担が今求められていると思われる。退職後も本学の発展を切に願っています。長い間大変有難うございました。

弘前大学での思い出

ME センター
佐藤正治

私が附属病院に入職したのは忘れもしない昭和51年の1月16日でした。

いよいよ明日から初出勤だと気合を入れて布団に入った前日の深夜、まだ臨月には二ヶ月以上も前だというのに突然妻の陣痛が始まり、慌てて病院に搬送、難産の末、早朝6時に長男が未熟児で誕生しました。結局そのまま出勤せざるを得なくなり、配属先の手術部で居並ぶ美人看護師さん達を前に徹夜あけのボーッとした顔で自己紹介したことを覚えています。後日、事務から「ぎりぎりセーフだね」といわれて出産手当金を沢山もらい（一般の企業よりはかなり高かったらしい）、ああ大学に来て良かったと思ったものです。しかし思えばこれが波乱の人生（?）の幕開けだったのかも知れません。

大学病院では当時人工心肺を使用する手術は少なく、月に2～3回くらいのものでした。そのため動物実験室で医師とともによく犬を使って人工心肺の実験をしていたのですが、予算もないので臨床で使用した回路や人工肺を何度も洗浄して使っておりました。ところが殆どの犬にはフィラリア（心臓にいる細長い寄生虫）がいて回路が詰まり、洗浄時にそれらがソバみたいにウジャウジャでてきて、大変気持ちが悪いものでした。

実験が終了するのは夜遅くになることも多く、よく先輩の医師達が実験の途中で夜食の出前をとってくれましたが、殆どの場合それはフィラリアそっくりのソバでした。実験台の犬を目の前にして「これがほんとのワンコソバだ」といいながらソバをすすっている先輩達をみて、どういう性格をしているんだろうと不思議に思いましたが、い

まだにそのソバの美味しさが忘れられません。

私が勤務した33年間にはいろいろな思い出、楽しいこと、つらいことや苦しいことがありましたが、多くの方々に支えられて今日までこれたのだと今になってつくづく分かった気がします。長い間本当に有難うございました。

弘前大学がこれからますますご発展をされることを心からお祈りしております。

受付時間・いま・むかし

医療支援センター
検査部門（検査部）
葛西　猛

昭和45年4月です。弘前大学病院検査部にお世話になったのが。さて、何を書こうかなと思っても脳裏をよぎる事が数多く困り果てました。病院のコメディカルスタッフとしての半生だったのでやはり検査業務に関して紹介します。少しオーバーな表現かも知れませんが、検体（検査する血液や尿など）が提出されると臨床検査技師は「患者さんが一人来院したな。」と思います。同時に受付時間外に提出されると「患者さん、非常に具合が悪いんだな」と思います。昭和50年代、時間外に提出される検体が非常に数多くなった時期がありました。副部長（医師、後に検査部長）が私たちの検査室で実技指導していた時代です。副部長から私たちに注意がありました。「当分の間、時間外検査の依頼を受けた時は、主治医から私（副部長）に連絡をさせてください」と。時間外提出の検体はまた元にもどりました。

いまはどうでしょうか？ほとんど受付時間がないと同じです。もちろん、医師不足、病院24時間オープン理念など受付時間を設ける時代ではないかも知れません。しかし、時間外検査は診療報酬加点も加味されている部分もありますが、非常にコスト高です。大学病院と雖も医療経済を最優先しなければならない時代です。メディカル、コメディカルスタッフ一丸となって弘前大学医学部附属病院、いや弘前大学病院を盛り上げていきたいものです。

弘前大学医学部附属病院での29年

リハビリテーション部
對馬祥子

私が弘前大学医学部附属病院に採用となったのは、理学療法部が開設されて半年後の昭和56年の3月でした。当時、まだ「リハビリテーション」は十分な社会的市民権を得ておらず、弘前大学病院におけるリハビリテーション医療の黎明期に、まさに「リハビリテーション」の啓蒙から関わることになりました。

当時の理学療法部は、まだ整形外科物理療法室ということで、現在、取り壊し作業を行っている外来棟西側にありました。狭いスペースの中に診察室と水治療法室は別部屋になっていたものの、受付も理学療法部門と作業療法部門の仕切りもないオープンな造りで、コメディカルスタッフも4人（うち1人は兼任）だけの家庭的な環境でした。しかし、ちょうど中央診療部化と施設・設備の充実移転の準備がすすめられていたところで、就任2ヶ月後には、現在、中央診療棟が建っている場所にあった旧三病棟一階に改築・移転いたしました。その後平成4年には病院改築に伴って、現在の二病棟一階に再度移転することになりました。業務を行いながらの移転作業は非常に大変でしたが、移転するたびにスペースが広くなるだけでなく、スッタッフが増員され、設備も整備されてきました。こうした施設・設備の充実に合わせるかのように、院内でのリハビリテーション医療はめざましく発展し、標榜も理学療法部からリハビリテーション部への変更が認められるに至りました。

このようなリハビリテーション部の過渡期のなかで、お若かった頃の整形外科教室の藤教授との出会いがあり、学生時代から興味のあった手外科疾患の作業療法（ハンドセラピィ）をライフワークとして取り組むことができ、対外的な活動も思う存分にさせていただきました。職場環境、人的交流、そして時代の趨勢に大変恵まれ、非常に充実した仕事を遂行できたと満足しています。このような気持ちで定年退職を迎えられるのは、私を育んでくださった藤教授をはじめとする多くの医師やリハビリテーション部のスタッフ、そして何より、沢山のことを学ばせてくださった患者様のおかげであると深く感謝申し上げます。

29年という年月も、過ぎてしまった今となっては、つかの間のように思われます。これからの人生の後半も、弘前大学附属病院で過ごした日々と同じように、充実した気持ちで過ごして参りたいと思います。ありがとうございました。

医事課
課長　佐々木輝雄

「趣味にも支えられて・・・これからも」

42年の永い大学職員生活を振り返ると、採用された頃は、まだ定員削減が始まる前で一係には5~6人もの職員が配置され、各学部には数名の用務員さんがいた時代でした。当時は職員同士が休暇を利用して、釣りや山菜・キノコ採りなどに出かけて夜にはそれを肴に部屋で飲み会をするという良き時代でもあり、学園紛争時の喧騒はありましたが仕事に対する緊張感、切迫感は今とは比べようもない時代でした。そのような時代から、徐々に定員削減で職員が減り、それとは反対に仕事量は増え続け、しだいに時間にも心にも余裕のない状況になってきたと感じております。近年、それが特に顕著になったと感じているのは私だけでしょうか。

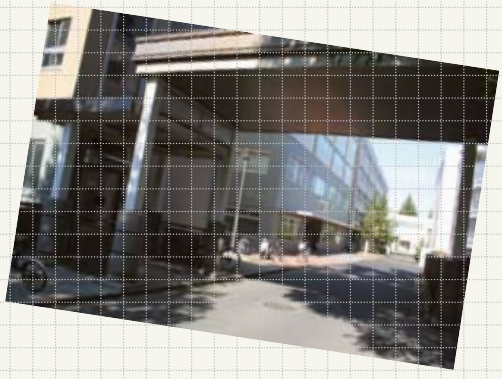
永い道のりでは、私も人なみに苦あり、楽あり、挫折もありの仕事人生でしたが、それを乗り越えることができた理由の一つが趣味にあったような気がしています。自分が楽しいことに没頭しているときは一時的に仕事を忘れることができ、気分転換となったと思っております。気の合う友人との渓流釣り、海釣り、山菜・キノコ採りで趣味と食卓への貢献という実益を兼ねた川海山での息抜き、先人が「晴耕雨読」という言葉を残しておりましたが、似たように、天気が良ければ川海山へ、天気が悪ければ家でミニねぶたの制作と休日は自分の趣味を中心に過ごしてきました。

そのことが仕事への影響として「良」と出たのか、「悪」と出たのかは図ることはできませんが、趣味があってこそ仕事が続けられたと自分に言い聞かせることにしております。

最近では、自分の趣味を紹介する際に「仕事の時間を除いた1日24時間の3分の2は自分の時間、1年365日の3分の1は祝休日や休暇などで自分の時間、仕事以外の自分の時間を有効に使うことが大切」ということを持論として付け加えるようにしています。

退職後も時間と体力が許す限り趣味を続けたいと思っております。また、更に新たなものにも挑戦をしてみたいという願望も抱いております。

永きにわたる勤務の継続には、一緒に仕事をさせていただいた諸先輩、同僚、後輩の方々、そして家族のことを外すことはできないことはもちろんであり、定年に当たって心から感謝の思いを表したいと思います。



弘前大学 Jazz 研究会
「Winter　Concert」

平成21年12月10日（木）から12月12日（土）の間、弘前大学大学会館3階大集会室において、Winter Concert が開催されました。

コンサートは、3日間開催され、10日と11日は、5グループが演奏し、12日は8グループが演奏しました。3日間とも日頃の練習の成果を発揮することができ、50名程の来場者を集めました。

クラシックギタークラブ
「第36回定期演奏会」

平成21年12月12日（土）17時から弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにおいて弘前大学クラッシックギタークラブ第36回定期演奏会が開催されました。

当日の来場者は、100名弱で第1部～第3部までの3部構成で演奏しました。

第1・2部では、ソロ・重奏、第3部では、全体合奏という構成で演奏しました。演奏は、クラッシック音楽だけなくポピュラーソングや季節にちなんだクリスマス曲も組み込まれていました。特に演奏の中では、大人数の全体合奏が講評でした。また、部員の友人・家族だけでなく、OB や地元の方も来ていただき楽しんでいただきました。

邦楽愛好会
「クリスマスコンサート」

平成21年12月19日（土）14時から弘前大学50周年記念会館みちのくホールにおいて弘前大学邦楽愛好会クリスマスコンサートが開催されました。

当日は、悪天候の中76名の来場者がありました。今回の演奏会は、誰でも知っている曲のメドレー、ポップス2曲、古典のアレンジ2曲、新しい作曲家の曲2曲と、邦楽に興味のない人達も楽しめるような曲を演奏しました。

弘前大学吹奏楽団
「第16回定期演奏会」

平成21年12月25日(金)17時から弘前市民会館大ホールにおいて弘前大学吹奏楽団第16回定期演奏会が開催されました。

当日の来場者は、540名で幅広い年齢層の方が来場しました。

3部構成で演奏され、2009年度全日本吹奏楽コンクール課題曲「マーチ『青空と太陽』」、「ロスト・ムーン～マン・オン・ザ・ムーン・エピソード2～」などの曲が演奏されました。

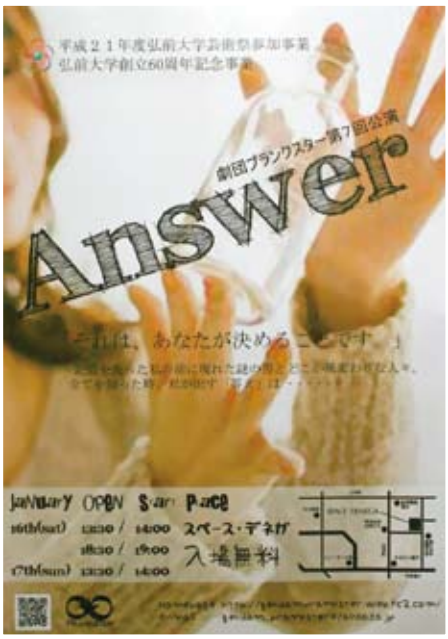
弘前大学混声合唱団
「第47回定期演奏会」

平成22年1月16日(土)18時から弘前文化センターホールにおいて弘前大学混声合唱団第47回定期演奏会が開催されました。

当日は、「コンクール報告ステージ」、「木村牧子アカペラ・コーラス・セレクション」、「無伴奏混声合唱の為の信長貴富 /7つの子ども歌」、「メンデルスゾーン6つの歌(野外で歌う)作品41」4部構成で合唱が行われました。

入場者数は、昨年と比べて宣伝期間が短かったことや当日天気が悪かったこともあり、例年と比べて少なかったが、団員とともに音楽を楽しんでいました。

劇団プランクスター
「第7回公演『Answer』」



平成22年1月16日(土)～17日(日)の両日、スペースデネガにおいて第7回公演「Answer」が計3回公演されました。

劇団プランクスターは、平成19年12月に結成以来、平成20年度は2回、平成21年度は4回の公演を行い、今回で7回目の公演となり、初めて大学構内以外での公演となりました。

教育学部美術教育講座
「卒業研究・制作展」

平成22年2月5日（金）～8日（月）に学内展（弘前大学大学会館3階）、2月20日（土）～21日（日）に学外展（スペースデネガ）にて開催されました。

弘前大学教育学部美術教育講座の卒業研究・制作展として毎年行われているもので講座が主催する学内展と学生が主催する学外展となっている。

教育学部美術教育講座藤井花恵個展実行委員会
「藤井花恵個展」

平成22年2月17日（水）～23日（火）の間、田中屋画廊にて藤井花恵展が開催されました。

教育学部美術絵画講座で毎年、絵画制作に対して「個展」を企画するもので平成16年から実施し、過去6年間で10人の個展を行っている。今年は、本学の大学院に進学が決定している藤井花恵の個展が開催され、入場者数は、220名で新聞記事にも取り上げされました。

弘前大学津軽三味線サークル
「5周年記念コンサート」

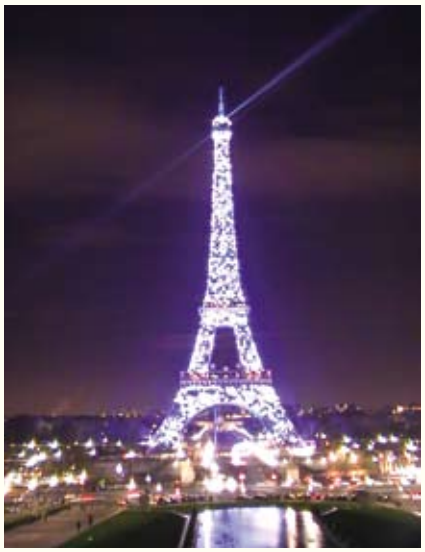
平成22年2月20日（土）14時30分から中三弘前店8階スペース・クアトロにおいて弘前大学津軽三味線サークル5周年記念コンサートが開催されました。

当日は、150席を準備していましたがそれを上回る来場者がありました。演奏曲は津軽じょんがら節ほかにサークルオリジナル曲などの演奏を行いました。

フランスでの研修生活について

保健学研究科
高橋　賢次

シャンティイ城


エッフェル塔

私は、2008年9月から1年間、保健学研究科で行われている緊急被ばく人材育成プロジェクトの一環として、フランスにある放射線防護・原子力安全研究所での研修に従事してきました。学会等で海外に行くことはあっても、実際に生活することは初めてであり、何もかもが新鮮で楽しい日々でした。それまで「フランス」といえば、「エッフェル塔」や「凱旋門」、「ルーブル美術館」、「ベルサイユ宮殿」などが思い浮かぶだけで、ほとんど何も知らないような状況でした。もちろんフランス語も経験がゼロでした。渡航前は不安も多々ありましたが、実際に行ってみると「フランス人は陽気で優しい」とすぐに分かりましたので、きっと楽しい1年が過ごせると感じ、その気持ちは最後まで変わることがありませんでした。

仕事は、「放射線による皮膚障害の研究」に従事していました。フランスは早くから原子力発電に力を入れており、現在でも周辺各国に電力を供給できるくらいに発展を遂げています。そのため、放射線業務に関する安全管理や生体への影響などの研究も平行して進められ、こちらも世界の最先端に位置しています。事故などで大線量に曝された患者が治療を受けに、世界中からフランスへ運ばれてきます。これらの成果は、事故や災害時の対応だけでなく、医療面で役立てられることも想定されています。放射線治療は、腫瘍の治療方法の中でも欠かすことができない方法ですが、腫瘍周囲の正常な組織へのダメージは避けることができず、治療中に正常な組織が損傷してしまうことがあります。この正常な組織へのダメージをできるだけ減らすにはどうしたらいいのか？　私が従事した研究のゴールはこういったところにもありました。

研究そのものは万国共通です。特に困ることはありませんでした。驚いたことといえば、ライフスタイルでしょうか。フランスは休日を楽しむ国でも有名ですが、うらやましいくらいに研究室のメンバーも楽しんでいました。そもそも、研究所の管理が厳しく、朝は7時半から門が開き、夜8時には門が閉まってしまいます。敷地内への入退管理はカードが発行され、日本であれば、そのカードで24時間自由に出入りができそうなものですが、朝は7時に来ても門は開かず、早く着いた人たちは7時半まで門の外で待っています。そして、夜8時を過ぎるとたとえ内側でも門が開けられなくなり、警備員に開けてもらわないと外に出られません。土・日・祝日は当然、終日閉鎖です。書類を出せば夜も休日も出入りができるそうですが、そのメリハリの徹底振りには本当に驚きました。というよりは、むしろ感心してしまいました。仕事は平日の日中で片付けて、夜や週末はプライベートを楽しむ。果ては、バカンスで思いっきり遊んでくる。とにかくワークライフバランスが完璧で、理想的なライフスタイルがそこにはありました。

それから、私の中のフランスといえばもうひとつ、そう、「フランス料理」です。1年間も滞在するのにグルメの国を味わわないわけには参りません。とはいっても、フランス語も話せないのにあちこち出掛けることもできませんし、そもそもどこへ行けば良いかも分かりません。しかし、そこはフランス、研究所内にも立派なカフェテラスがありました。その昔、「フランスでは昼食時みんな家に帰って食べる」なんてことを本で見た記憶がありました

セーヌ河とノートルダム大聖堂

プロヴァンの街並み

ベルサイユ庭園　夜の噴水

が、研究所の誰もが毎日カフェテラスで食べていました。カフェテラスには、パスタ類や肉類、魚類のコーナーがあり、メニューも日替わりでいろいろ選ぶことができます。ただし、フランスでは定番の、山盛りのフライドポテトが付いたステーキ（Steak frites）は専用ブースで毎日提供されていました。日本では揚げ物が多いように感じますが、フランスの基本は煮込み料理でしょうか。魚なども焼くよりは軽めの下味で蒸し煮にして、いろいろなソースをかけるものが多かった気がします。見た目よりクセがなくコクと旨みが詰まった血のソーセージ Boudin やボルドー風の魚のオーブン焼き、詰め物系の paupiette などがお気に入りでした。そして、とにかくパンが美味しかったです。「日本で pain は何ていうんだ？」と聞かれたので、「パンです」と答えたら、眼を丸くしていました。意外と知られていないようです。ちなみに日本米とは違いますが、ライスも付け合わせとして毎日選ぶことができましたので、白いご飯が恋しくなることもありませんでした。それから、デザート類も毎日豊富で、皆さん何かしら食べていました。フランス人曰く「デザートがないと、食事が終わらない」だそうです。昼食もゆったりしていて、終始おしゃべりしながら、楽しくゆっくり食べることができました。残念ながらフランス語でしたので、ほとんど理解できませんでしたが・・・。「いつか会話に溶け込めるようになりたい」と、フランス語修得のモチベーションにはなりました。

この言葉の壁、ある程度は想像していたものの、やはり予想以上に大きいものでした。英語もままならない状況である上に、フランス語は全く初めての経験でしたので、途方に暮れました。渡航前の付け焼刃では全く歯が立ちませんでした。幸い研究室では、私には英語で会話をしてくれたので、何とかなっていました。しかしながら、研究室のメンバーは地元の人々ですので、周りでは終始フランス語が飛び交っていました。大変なのはミーティングがフランス語だったことでした。フランス語のつづり自体は英語に似ているので、辛うじてスライドから内容を理解できた程度でした。最大の問題は街に出たときでした。「フランス人は英語を知っていても絶対に話してくれない」と言われることがありますが、確かに英語は通じないことはありました。でも、それは「フランス人全般でいえば、それほど英語が得意ではない」のが真実のようでした。知っていれば使ってくれるので、そのときは本当に助かりました。もう３ヶ月も過ぎた冬のある日、パリ近郊では珍しいくらいの大雪（東京でいう大雪程度ですが・・・）が降っていて、バスが遅れて30分以上バス停で待っていても来る気配がなく、この先待つかどうか悩みながらぼんやり立っていたところ、バス停の向かいに住むマダムが気にかけてくれてようで、カップにスープを入れて持って来てくれました。最初、フランス語で話しかけられたのですが、「話せません（parle pas français!）」と返したらすぐに英語に切り替えしてくれました。「いつもなら、直ぐにバスが来るのだけど」としばしお話をして、体も心も温かくなりました。話をしていたら直ぐにバスが来て無事に家に帰ることができ、フランスが大好きになった忘れられないひと時でした。

研究室の皆さんと

まだまだ、いろいろと書き足りないこともありますが、フランス人の人柄に触れ、文化や歴史、社会なども吸収することができ、仕事以外でも大きな収穫のある貴重な経験ができました。また、いつの日かもっとフランス語を話せるようになって再び訪れたいと思います。

Ⅴ　新任教員自己紹介

理工学研究科

物質創成化学科
教授
岡 﨑 雅 明

11月より理工学研究科（理工学部物質創成化学科）に着任いたしました。京都大学化学研究所より参りました。後期から授業を担当させていただき、試行錯誤を繰り返しながら、学生にとって役に立つ授業になるよう取り組んでおります。研究分野は無機化学と有機化学の境界領域に位置する有機金属化学です。純粋に知的好奇心をくすぐる「面白い」研究を学生と共に展開していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

教育学部

社会科教育講座
講師
小 瑶 史 朗

このたび教育学部・社会科教育講座に着任しました小瑶史朗（こだまふみあき）と申します。専門は社会科教育学で、特に開発途上地域の教材化やアジア諸国との相互理解教育のあり方に関心を持ってきました。こうした課題を、青森・弘前という場所に立脚して深めていければと考えております。どうぞよろしくお願いします。

Ⅵ　けいじばんコーナー

弘前大学教育に関する表彰式を実施

弘前大学では、平成21年度から、前年度において「教育に関して優れた業績を上げた教員」及び「成績優秀学生」を対象として表彰制度を導入し、1月15日（金）に事務局大会議室で表彰式を実施した。

今回の受賞者は、教員7名、学生25名で、表彰式には、各学部長・研究科長も出席し、遠藤学長から一人ひとりに表彰状と、学生には副賞も贈呈された。

これを受けて、教員を代表して保健学研究科の西澤一治教授から、「後世の評価に耐えうる教育をなせ、という叱咤激励の意味と受け取り、更なる研鑽と教育内容の充実に取り組みたい」、学生を代表して人文学部2年の三上萩乃さんから、「このような賞をいただいたので、今後いっそう勉学に励み、努力していきたい」と謝辞が述べられた。

遠藤学長（前列右から5人目）と受賞者ら
（教育に関して優れた業績を上げた教員）

遠藤学長（前列右から6人目）と受賞者
（成績優秀学生）

Ⅶ　編集後記

今年は、年明け早々に大雪になったり、2月25日には2月の観測では史上最高の気温（17．2度）を記録するなど変化に富んだ天気が続きました。また、先月には、バンクーバーで冬季オリンピックが開催され、本学出身目黒萌絵さんも活躍されました。

さて、今年度最後の号166号をお届けいたします。本号の特集は、「卒業・修了・退職にあたって」で、3月号は毎年この特集をおこなっております。今年度も、卒業される学生の皆さんやご定年を迎える教職員の方々から多くの原稿をお寄せいただき厚く御礼申し上げます。卒業・修了される学生は、これから歩んでいく「第一の人生」、退職される教職員の方々には、「第2の人生」での活躍を祈念いたします。

（T.S）

弘前大学生協は ステップ1 を卒業します

弘前大学生協は環境マネジメントシステムの導入で、事業活動や組合員活動の環境負荷軽減を推進しています。

平成20年11月のKES（環境マネジメントシステムスタンダート）の「ステップ1」の登録以降、事業面ではエネルギーや自然資源削減、組合員活動ではキャンパス美化や組合員意識の啓発をテーマとして取り組み、下記のような成果を出すことができました

●平成20年と21年の取組比較 （データは両年とも3月～翌年1月までの累計比較）

【レジ袋の利用枚数】 （単位：枚）

	20年	21年	削減枚数
枚数	15.597	9.264	6.333

【割箸再利用のための回収数】 （単位：本）

	20年	21年	回収増数
枚数	77.440本	132.800本	55.360

【店舗電気使用量】 （単位：kwh）

	20年	21年	削減率
枚数	412,504	398,592	3.37%

【食堂の水使用量】 （単位：㎥）

	20年	21年	削減率
枚数	9,282	8,833	4.84%

上記の他に、弁当容器回収率アップ・店舗ガス使用量・事務用紙使用枚数削減など全部で９項目を重点にマネジメントしていますが、平成22年度はさらに高いレベルの活動をめざして、ISO14001規格に匹敵する**「ステップ2」**にチャレンジする計画です。

弘前大学ご卒業をお慶び申し上げます

●在学・在任中のご利用に感謝いたします●

ご卒業やご栄転などで弘前大学を後にする皆様に、これまでご出資していただいたこと、沢山ご利用いただきましたことを深く感謝いたします。生協はこれからも学生や教職員組合員に支えられて成長できるよう頑張ります。
ご来弘の機会にはぜひお立ち寄りをお願いいたします。

【重要】出資金返還手続きのお知らせ

生協ではただいま、出資金の返還手続きを案内しています。まだ手続きをされていない方はお忘れのないようお願い申し上げます。また、院への進学などで、引き続き組合員としてご加入いただく場合も、身分変更手続きが必要です。

①店舗で**「出資金返還＆身分変更申込用紙」**に記入し手続きをお願いいたします。
②出資金返還は振込となります。5月末まで有効な金融機関口座を申込書にご記入下さい。
③3月末までの手続き者は、5月23日(月)付けでの振込による返還となります。

●弘前大学オリジナルグッズ●

平成21年度の金木農場産米から醸造された、「日本酒 弘前大学」の新酒が2月23日に発売されました。

発売前に実施された新酒お披露目会では、例年以上のご好評をいただき、2月中の販売本数も昨年を大きく上回っております。

これからのご活躍が期待される卒業生の皆様にも、いろいろな場面でご愛飲いただければ幸いです。

●日本酒「弘前大学」は下記店舗でお求めいただけます。
弘大生協サリジェ店 Tel **0172-34-4622**

弘前大学 学園だより　Vol.166

2010年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人　弘前大学
「学園だより」編集委員会

委員長
奥野浩子（教育・学生委員会）

委　員
福田健太郎（人文学部）
杉原かおり（教育学部）
松谷秀哉　（医学研究科）
門前　暁　（保健学研究科）
小松尚夫　（理工学研究科）
藤田　隆　（農学生命科学部）
三浦信義　（学生課）
佐々木忠　（学生課）

印刷：ワタナベサービス株式会社